

錦町北遺跡

都市計画道路錦町野作線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1996年3月

河内長野市遺跡調査会

河内長野市遺跡調査会報Ⅳ『錦町北遺跡』正誤表

頁 行	誤	正
38頁 1行	口縁部 <u>で</u> のみで	口縁部のみで

序 文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、高野街道に代表される和歌山や奈良へ向かう南河内の交通の要衝として発展してきた街です。

このため市内には数多くの文化財が残されています。

このような河内長野市も大阪市内への通勤圏に位置しているため住宅都市として近年、開発の波がおしよせてきています。

開発がもたらす文化財や自然に対する影響には大きいものがあります。特に、埋蔵文化財は開発と直接に結び付く大きな問題です。

遺跡に託されている河内長野の先人達のメッセージを現在の市民、更には未來の市民に伝えていかねばなりません。

本書は発掘調査の成果を収録しています。先人達のメッセージの一部でも理解するための資料として活用していただければ幸いです。

これらの発掘調査に協力していただきました施主の方々の埋蔵文化財への深いご理解に末尾ながら謝意を表するものです。

平成8年3月

河内長野市遺跡調査会
理事長 中尾謙二

例　　言

1. 本報告書は平成6年度に河内長野市遺跡調査会が河内長野市建設部土木課(現都市建設部道路交通課)から委託を受けて実施した錦町北遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査費12,094,300円は河内長野市が負担した。
3. 調査は本市教育委員会社会教育課文化係(現教育部社会教育課文化財保護係)主査尾谷雅彦・鳥羽正剛を担当者として実施した。
4. 調査にかかる事務は事務局長の松垣孝康が平成6年度、濱田宗良(社会教育課課長補佐兼務)が平成7年度を主担した。
5. 本書の執筆は第1章第1節・第2章第2節を尾谷が、第1章第2節・第2章第1節・第3章を鳥羽がそれぞれ分担した。
6. 編集は尾谷と鳥羽が行い、枠本裕子がこれを補佐した。文責は尾谷・鳥羽が負うものである。
7. 発掘調査及び内業整理については下記の方々の参加を得た。
嘉悦真紀子・喜多順子・久保八重子・古島亮介・小森光・阪木しづこ・重野真紀・
杉本祐子・田川富子・辻野秀之・中尾智行・中村嘉彦・林和宏・東田幸子・藤井美
佐子・古池陽子・間瀬未明・松尾和代・松村佳映・三井義勝・牟田口京子
8. 航空測量は国際航業株式会社、発掘作業は株式会社島田組が実施した。
9. 遺物及び遺構の一部の写真は中西和子が撮影した。
10. 石器については栗田薰氏(富田林市教育委員会)の指導を得た。記して感謝する。
11. 本調査の記録はスライドフィルム等でも記録しており、広く一般の方々に活用される
ことを望むものである。

凡 例

1. 本報告書に掲載されている標高は T P を基準としている。
2. 土色は新版標準土色帖による。
3. 平面測量基準は国家座標第VI系による 5 m メッシュを基準に実施したものである。
4. 図中の北は座標北である。
5. 本書の遺構名は下記の略記号をもちいた。

S B … 堀立柱建物	S E … 井戸	S D … 溝	S K … 土坑
S L … 埋甕	S N … 埋桶	S U … 集石遺構	S W … 石組遺構
N R … 自然流路			
6. 文中の瓦器塊の型式分類は尾上実氏の和泉型瓦器塊の編年に基づくものである。また肥前陶磁器は大橋康二氏の編年に基づくものである。
なお、用語の表記については調査会の名称によるものである。
7. 遺構の実測図の縮尺は、1/30・1/60・1/100・1/400とした。
8. 遺物の実測図の縮尺は、土器1/4・1/8、石器1/3を基準に各遺物の状況により縮尺は替えている。
9. 遺物の実測図のうち断面黒塗りは瓦器・瓦質土器・須恵質土器・陶磁器、その他は白抜きである。
10. 遺物番号と写真図版の番号は共通する。

目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
目 次	
挿図目次	
表目次	
図版目次	
第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 位置と環境	5
第2章 調査の結果	7
第1節 遺構	7
第2節 遺物	33
第3章 まとめ	40

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 河内長野市遺跡分布図(1/40000)	2
第3図 調査区位置図(1/5000)	5
第4図 遺構配置模式図(1/400)	7
第5-1図 調査区土層断面実測図(1/60)	8
第5-2図 調査区土層断面実測図(1/60)	9
第6図 S B 1 遺構実測図(1/60)	9
第7図 S E 1 遺構実測図(1/30)	10
第8図 S E 1 出土遺物実測図	11
第9図 S K 2・3 出土遺物実測図	11
第10図 S L 1 遺構実測図(1/30)	12
第11図 S L 1 出土遺物実測図	12
第12図 S L 2 遺構実測図(1/30)	13
第13図 S L 2 出土遺物実測図	13
第14図 S N 1 遺構実測図(1/30)・出土遺物実測図(1)	13
第15図 S N 1 出土遺物実測図(2)	14

第16図	S N 2 遺構実測図(1/30)・出土遺物実測図	15
第17図	S N 3 出土遺物実測図(1)	16
第18図	S N 3 出土遺物実測図(2)・S N 4 出土遺物実測図	17
第19図	S U 1 遺構実測図(1/60)・出土遺物実測図	18
第20図	S W 1 遺構実測図(1/60)	18
第21図	S W 2 遺構実測図(1/60)・出土遺物実測図	19
第22図	S W 3 遺構実測図(1/60)	19
第23図	N R 1 遺構実測図(1/60)	20
第24図	N R 1 上層出土遺物実測図(1)	21
第25図	N R 1 上層出土遺物実測図(2)	22
第26図	N R 1 下層出土遺物実測図	23
第27図	包含層出土遺物実測図(1)	24
第28図	包含層出土遺物実測図(2)	25
第29図	包含層出土遺物実測図(3)	26
第30図	包含層出土遺物実測図(4)	27
第31図	包含層出土遺物実測図(5)	28
第32図	包含層出土遺物実測図(6)	29
第33図	錦町北遺跡遺構全体図(1/100)	31～32
第34図	弥生土器・石器実測図	34

表 目 次

第1表	河内長野市遺跡地名表	3
第2表	出土遺物の分類	33

図 版 目 次

図版1	遺構 調査区全景(東から)
図版2	遺構 調査区全景(西から、真上から)
図版3	遺構 S B 1(東から)、S D 1(西から)
図版4	遺構 S D 2(南から)、S D 3(北から)
図版5	遺構 S E 1(南から)、S L 1(北から)
図版6	遺構 S L 2(南から)、S N 1・4(北から)
図版7	遺構 S N 2(東から)、S N 3(南から)
図版8	遺構 S U 1(北から)、S W 1(北から)

- 図版9 遺構 SW 2(南から)、NR 1(東から)
- 図版10 遺物 S E 1(1~7)、S K 2(8)、S K 3(9・10)、S L 1(11~14)、S L 2(15・16)
- 図版11 遺物 S N 1(18)、S N 2(26~33)
- 図版12 遺物 S N 3(35~39・41~47・51)
- 図版13 遺物 S N 3(48~50・52・53)、S U 1(56~59)、S W 2(60・61)、NR 1上層(62~68)
- 図版14 遺物 NR 1上層(69~89)
- 図版15 遺物 NR 1下層(90~96・98・99)、包含層(100~102・104~116・118・119)
- 図版16 遺物 包含層(121~123・125~146)
- 図版17 遺物 包含層(147~176・185・186)
- 図版18 遺物 包含層(177・178・180~184・187~204)
- 図版19 遺物 包含層(205~213・215~222)

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

河内長野市は近年の著しい人口増加も一段落し、成熟した住宅都市としての様相を呈してきた。しかし、まだまだそれにもなう都市の基盤整備を進めなければならない。このような状況の中で、市は公共上下水道、アクセス道路、公園等の都市機能の整備、文化会館などの文化施設の充実に努めているところである。

しかし、このような公共関係の整備も一般の開発と同じように埋蔵文化財を避けて通ることはできないものである。市の教育委員会と建設部とは、公共事業に関連する埋蔵文化財の取り扱いについては計画段階から保存協議を進め、文化財保護と開発の調整に力を注いだ。

本次調査の原因となった都市計画道路錦町野作線整備事業については当初周知の埋蔵文化財包蔵地であったが、計画段階から埋蔵文化財の取り扱いについて協議を進めていた。協議の結果、道路建設予定地の総面積が500m²以上であることから埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を実施することになった。平成4年5月1日、平成5年度の建設予定部分について事業主体者である建設部土木課から教育委員会社会教育課宛に埋蔵文化財試掘調査依頼書が提出された。これを受けた教育委員会は調査機関として河内長野市遺跡調査会に委託するよう回答し、平成4年6月1日建設部と遺跡調査会は委託契約を締結した。試掘調査は平成4年6月16日から同年6月26日にかけて実施された。7ヶ所に試掘坑を設定して調査した結果、遺構遺物とも検出されなかった。この旨を教育委員会と建設部に報告した。この調査結果に基づき、教育委員会は工事施工には支障がないと判断し、第1期工事が着工された。

その後、平成6年度には引き続き第2期工事が実施されることになり、埋蔵文化財の取り扱いについて再度建設部から教育委員会に事前協議がなされた。これについて教育委員会は前回と同様試掘調査の必要があることを説明した。建設部はこれを了解し、平成5年11月19日に埋蔵文化財試掘調査依頼書が提出された。教育委員会は調査機関として、前回と同様遺跡調査会に委託するよう回答し、平成6年3月7日に契約を締結した。調査は平成6年3月8日から同年3月25日にかけて実施した。調査方法は前回と同様6ヶ所の調査



第1図 遺跡位置図



第2図 河内長野市遺跡分布図(1/40000)

番号	文化財名称	種類	時代
1	長野神社遺跡	社寺	室町
2	河合寺	社寺	
3	観心寺	社寺	平安～
4	大鶴山古墳	古墳	古墳（前期）
5	大鶴山南古墳	古墳？	古墳（後期）
6	大師山遺跡	集落	弥生（後期）
7	奥津寺	寺社	
8	鳥帽子八幡神社	社寺	室町
9	塚穴古墳	古墳	古墳（後期）
10	長池窯跡群	生產	平安～近世
11	小山田1号古墓	墳墓	奈良
12	小山田2号古墓	墳墓	奈良
13	延命寺	社寺	
14	金剛寺	社寺	平安～
15	日野觀音寺遺跡	社寺	中世
16	地藏寺	社寺	
(17)	岩湧寺	社寺	平安～
18	五ノ木古墳	古墳	古墳（後期）
19	高向遺跡	集落	旧石器～中世
20	鳥帽子形城	城館	中世～近世
21	喜多町遺跡	集落	縄文～中世
22	鳥帽子形古墳	古墳	古墳（後期）
23	木庄窯跡	生產	
24	塙谷遺跡	散布地	縄文～中世
25	度谷八幡神社	社寺	
26	蟹井瀬南遺跡	散布地	中世
27	蟹井瀬北遺跡	散布地	中世
28	天見駅北方遺跡	散布地	中世
29	千早口駅南遺跡	散布地	中世
30	岩瀬兼定寺	墳墓	近世
31	清水遺跡	散布地	中世
32	伝「仲哀廟」古墳	古墳？	
(33)	堂村地蔵堂跡	社寺	近世
34	塙畑埋墓	墳墓	近世
(35)	中村河原陀堂跡	社寺	近世
(36)	東の村觀音堂跡	社寺	近世
(37)	西の村觀音堂跡	社寺	近世
38	清水阿弥陀堂跡	社寺	近世
39	浦尻秀勤堂跡	社寺	近世
(40)	宮ノ下内裏	墳墓	古墳
41	宮山古墳	古墳？	古墳
42	宮山遺跡	散布地	縄文～中世
43	西代瀬岸星跡	城館	江戸
		散布地	飛鳥～奈良
44	上原町墓地	墳墓	
45	栗持寺	社寺	鎌倉
46	栗山遺跡	祭祀	中世～近世
47	寺ヶ池遺跡	散布地	縄文
48	上原遺跡	散布地	中世
49	住吉神社遺跡	社寺	
50	高岡神社遺跡	社寺	中世
51	青が原神社遺跡	社寺	
52	膳所瀬河州出張所跡	城館	江戸
53	双子塚古墳跡	古墳	古墳
54	斐子尻遺跡	散布地	縄文～中世
55	河合寺	城館	
56	三日市遺跡	集落	旧石器～近世
57	日の谷城跡	城館	室町
58	高木漁跡	散布地	縄文
59	沙の山城跡	城館	中世
60	峰山城跡	城館	中世
61	福荷山城跡	城館	中世
62	国見城跡	城館	中世
63	旗廻城跡	城館	中世
番号	文化財名称	種類	時代
64	櫻現城跡	城館	中世
(65)	天神社遺跡	社寺	
(66)	葛城第15経塚	経塚	
67	加賀田神社遺跡	社寺	中世
68	庚申堂	社寺	
69	石仏城跡	城館	中世
70	佐近城跡	城館	中世
71	旗尾城跡	城館	中世
72	葛城第16経塚	経塚	
(73)	葛城第18経塚	経塚	
(74)	葛城第19経塚	経塚	
(75)	伊尾裏	裏	城館
(76)	大沢裏	裏	城館
(77)	三国山経塚	経塚	
(78)	光滝寺	社寺	
(79)	猪子城跡	城館	中世
80	蟹井瀬神社遺跡	社寺	
(81)	川上神社遺跡	社寺	
82	千代田神社遺跡	社寺	
83	向野遺跡	遺跡	縄文～室町
84	古野町遺跡	散布地	中世
85	上原北遺跡	散布地	
86	大日寺遺跡	社寺	弥生～中世
87	高向南遺跡	散布地	縄文
88	小塙遺跡	集落	縄文～奈良
89	加塙遺跡	集落	古墳（後期）
90	尾崎遺跡	集落	古墳～中世
91	ジョウノマエ遺跡	城館？	中世
92	仁王山城跡	城館	中世
93	タコラ城跡	城館	中世
94	岩立城跡	城館	中世
95	上原近世瓦窯	生產	近世
96	市町東遺跡	散布地	弥生～中世
97	上田町窯跡	生產	近世
98	尾崎北遺跡	散布地	古墳
99	西之山町遺跡	集落	中世
100	野間里遺跡	集落	平安
101	鳴尾遺跡	散布地	中世
102	上田町遺跡	散布地	古墳～中世
103	上原中遺跡	散布地	古墳～中世
104	小野家	墳墓	
(105)	葛城第17経塚	経塚	
106	栗原堂跡	社寺	中世～
107	野作遺跡	集落	中世
108	寺元遺跡	集落	奈良～中世
(109)	鳩原古墳跡	散布地	中世
110	法師冢古墳跡	古墳	
111	山上講山古墳跡	古墳	
112	西浦遺跡	集落	古墳～中世
113	地福寺跡	社寺	近世
114	宮の下遺跡	集落	平安～中世
115	宋町遺跡	散布地	弥生～中世
116	飼町遺跡	散布地	中世
(117)	大井遺跡	散布地	中世
118	館町北遺跡	集落	弥生～中世
119	市町西遺跡	散布地	縄文～中世
120	宋町南遺跡	散布地	中世
121	宋町東遺跡	散布地	
122	橋町東遺跡	散布地	
123	沙の宮町南遺跡	散布地	奈良
124	沙の宮町遺跡	散布地	中世
125	神ヶ丘近世墓	墳墓	近世
126	増福寺	社寺	中世
127	三昧城遺跡	墳墓	縄文～近世

() は地図範囲外

第1表 河内長野市遺跡地名表

坑を設定して実施した。その結果、大部分の調査坑から中世の遺構・遺物が検出された。また付近に寺院と思われる小字名があることから寺院跡が存在する可能性が考えられた。

この調査結果に基づいて、平成6年4月22日に遺跡の新規発見通知が建設部から教育委員会に提出され、発見地を錦町北遺跡と命名した。その後、文化庁からの回答で工事施工前に発掘調査が必要との指示があり、平成6年4月27日、建設部から埋蔵文化財発掘調査依頼書が教育委員会に提出された。教育委員会は調査については引き続き遺跡調査会に委託するよう指導し、平成6年12月1日、委託契約を締結した。調査は平成6年12月2日から平成7年2月28日にかけて面積約500m²について実施した。

発掘調査の結果、当初考えられていた寺院関連の遺構の検出はなく、埋甕、埋桶、石組遺構などで構成される近世初頭の屋敷地の一部と思われる遺構を検出した。その他特筆すべき成果として、弥生時代中期の土器などが検出されたことから、石川上流域に点在する弥生遺跡を知る手掛かりが得られたことは一つの大きな成果であった。

第2節 位置と環境

錦町北遺跡は、河内長野市錦町に所在する弥生時代中期・中世・近世の複合遺跡である。地理的環境としては、和泉葛城山系を水源とする石川の左岸の低位段丘上、標高113mに位置する。

歴史的環境としては、縄文時代には石川本流から天見川沿いに北から向野遺跡、喜多町遺跡、三日市遺跡、小塙遺跡の4遺跡があり、後期を中心とする土器が出土している。また、石川本流には高向遺跡や宮山遺跡があり、宮山遺跡からは中期後半の土器と共に堅穴住居も確認されている。さらに三日市遺跡や小塙遺跡からは早期の押型文土器が出土している。これらの遺跡以外に高木遺跡、寺ヶ池遺跡、菱子尻遺跡からはサヌカイト片や石器が出土している。

弥生時代は石川左岸の塙谷遺跡や天見川右岸の三日市遺跡から中期の遺物が、大師山遺跡からは後期の遺物が出土している。

古墳時代は天見川を見下ろす位置に前期の前方後円墳である大師山古墳、中期の三日市遺跡の古墳群、後期の鳥帽子形古墳が分布している。石川本流の向野町から寿町にかけては五ノ木古墳、法師塚古墳、双子塚古墳などの古墳が分布していた。また、石川の左岸の上原町には塙穴古墳が現存している。集落遺跡では前期から中期にかけては天見川沿いに三日市遺跡があり、後期後半では同じく天見川沿いに喜多町遺跡、そして左岸の段丘上に近接して小塙遺跡、加塙遺跡がある。

奈良時代は高向遺跡や喜多町遺跡、小塙遺跡から掘立柱建物や土坑が検出されている。また、本市と大阪狭山市との市境の小山田町からは2基の火葬墓が発見されている。

平安時代は向野遺跡、天見川沿いの尾崎遺跡で10世紀の掘立柱建物、三日市遺跡の11～12世紀の掘立柱建物、そして石川本流の野間里遺跡が確認されている。また市内にある觀心寺や金剛寺などの寺院は平安時代末頃から伽藍が整い多くの莊園を有していた。

中世になると、交通路が整備され各谷筋を通る高野街道や天野街道沿いに集落が分布している。とくに、西高野街道では北から菱子尻遺跡や古野町遺跡があり、東高野街道では向野遺跡がある。西、東が合流して天見川沿いを南に伸びる高野街道では、合流付近の長野神社遺跡や、喜多町遺跡、さらに南に三日市遺跡、尾崎遺跡、ジョウノマエ遺跡、清水遺跡、千早口駅南遺跡(寺院跡も含む)、天見駅北方遺跡、蟹井淵北遺跡、蟹井淵南遺跡と



第3図 調査区位置図(1/5000)

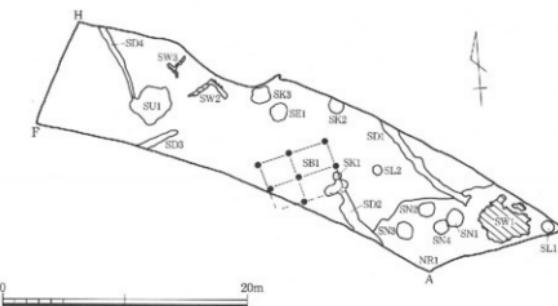
続く。これらは明らかに街道と共に発達した遺跡である。集落跡以外では、同じように街道を見下ろす尾根上には南北朝から戦国時代にかけての城塞が20ヶ所分布している。生産遺跡としては平安時代から中世にかけての炭焼窯と思われる窯跡が市内の山間部に分布している。

近世になると近江膳所藩や河内西代藩の陣屋跡があり、さらに、確認数は少ないが近世瓦窯跡も、地元の伝承通り確認されている。

このような歴史的環境の中で錦町北遺跡は、北側0.2kmに西代藩陣屋跡、同じく0.5kmに中世の集落跡である西之山町遺跡、同じく0.6kmに膳所藩河州出張所跡、東側0.3kmにサヌカイトの散布地の栄町東遺跡、同じく0.6kmに弥生時代後期・中世の寺院跡の大日寺遺跡、同じく0.7kmに中世の長野神社遺跡、南側0.1kmに弥生時代中期・中世の栄町遺跡、同じく0.4kmに烏帽子形城、西側0.3kmに中世の鍛冶遺跡である野作遺跡、同じく中世の錦町遺跡、同じく0.5kmに中世の集落跡の上原北遺跡、同じく0.6kmに中世の栄町南遺跡などの遺跡が周囲に位置している。

第2章 調査の結果

第1節 遺構



第4図 遺構配置模式図(1/400)

1. 概要

遺構は調査面積に比して密度が濃厚で、豊富な種類が検出された。検出した遺構は掘立柱建物1棟、溝4条、井戸1基、土坑3基、埋甕遺構2基、埋桶遺構4基、集石遺構1基、石組遺構3基、自然流路1ヶ所があった。

遺物については調査区の位置する場所の地下水位が高いために、市内遺跡では出土例の稀な木製品の資料が数点得られた。

2. 層序(第5-1・5-2図)

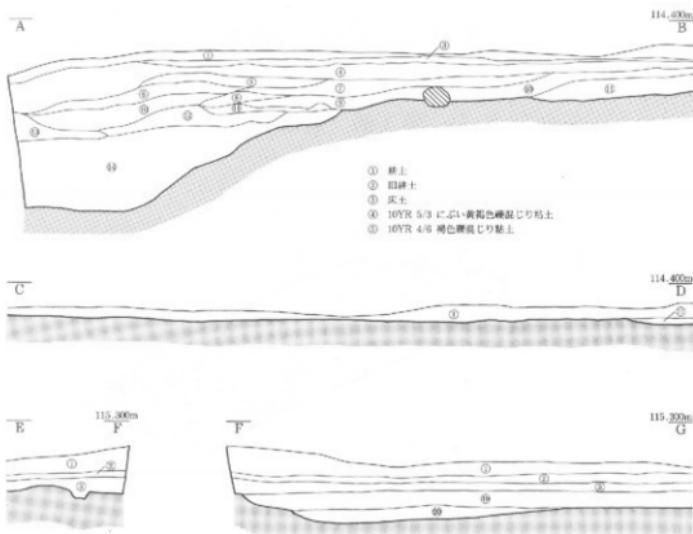
遺構面は現地表下0.35mで検出された。基本層序は①耕土(層厚0.1m)、③床土(層厚0.05m)、④10YR5/3にぶい黄褐色碌混じり粘土(層厚0.05m)、⑩5Y4/1灰色細砂(層厚0.05m)、⑪10YR3/4暗褐色粘土混じり粗砂(層厚0.1m)であった。地山は10YR4/6褐色碌混じり粗砂であった。

3. 遺構

(1)掘立柱建物

〔SB1〕(第6図、図版3)

SB1は調査区の中央に位置する。遺構の南側は一部調査区外に及ぶが、桁行2間×梁行2間の掘立柱建物と見られる。遺構の規模は桁行2間(5.82m)×梁行2間(4.28m)、桁



第5-1図 調査区土層断面実測図(1/60)

行の柱間2.60~3.20m、梁行の柱間2.12~2.20m、掘方の径0.22~0.58m、掘方の深さ0.02~0.33mを測る。建物の軸方向はN-74°-Eを示す。

出土した遺物はなかった。

(2)溝

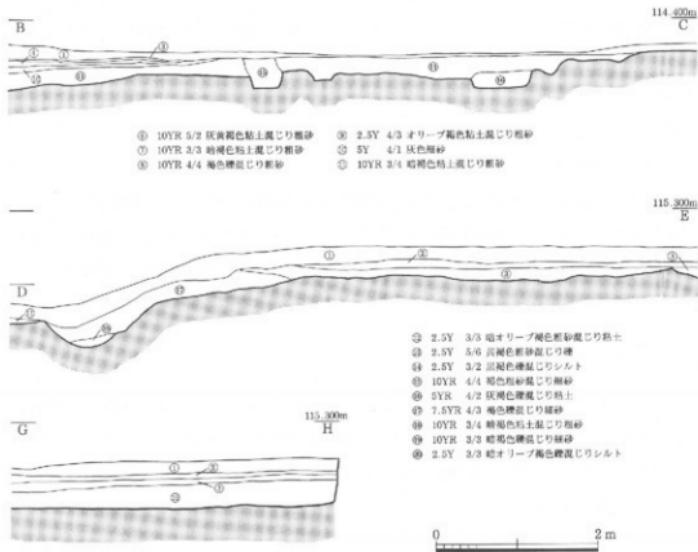
[S D 1] (図版3)

S D 1は調査区の東側に位置する。遺構の北端は調査区外の北西方向へ及び、南端はN R 1内で消滅しているが、本来これに続く部分があったことが底部両端の傾斜度から考えられる。遺構内には川原石を用いて排水溝が設けられていた。川原石は両縁に沿って並べられ、南側部分では断面形がコの字を伏せたような形で、両縁の石に更に石を渡して蓋をした状況が観察できた。平面の配置から推測すると、後述するS W 1の方向へ続くことから、S W 1に水を注ぐ導水路の可能性があるが、詳細は不明である。遺構の規模は検出長10.05m、北側の幅0.78m、南側の幅0.45m、深さ0.14m~0.21mを測る。使用された川原石の規模は最大38cm×30cm×10cmを測る。

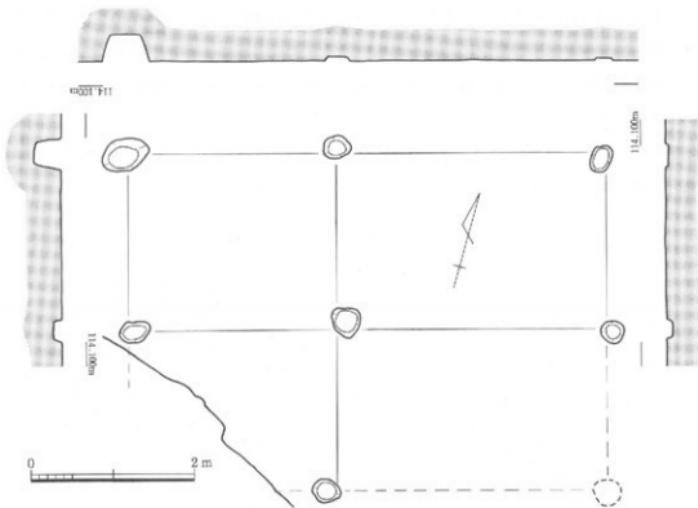
遺物は土師質土器・瓦器・白磁が出土したが、細片のため図化できなかった。

[S D 2] (図版4)

S D 2は調査区の南側の中央付近で検出された。遺構の南側には川原石が東側に面を揃



第5-2図 調査区土層断面実測図(1/60)



第6図 S B 1 遺構実測図(1/60)

えて多い所で2段組まれており、南端は調査区外に及ぶ。S D 1とほぼ同じ軸方向を持つため同時期の遺構である可能性が高い。検出した遺構の規模は長さ6.90m、最大幅2m、最小幅0.51m、深さ0.24m～0.30mを測る。使用された川原石の規模は最大45cm×39cm×30cmを測る。

遺物は土師質土器が出上したが、細片のため図化できなかった。

[S D 3] (図版4)

S D 3は調査区の北西部に位置する。遺構の西端は調査区外に及ぶ。遺構内には平たい川原石を水平に並べ、一部の下部に炭化した丸太状の木片が敷かれていた。検出した遺構の規模は長さ3.40m、検出幅0.38m～0.60m、深さ0.07m～0.12mを測る。使用された川原石の規模は最大46cm×28cm×10cm、検出した木片は長さ70cm、径15cmを測る。

出土した遺物はなかった。

[S D 4]

S D 4は調査区の北隅に位置し、北端は調査区外に及ぶ。検出当初は、川原石が両縁に沿って配列されている様子が観察できたが、調査中の削平により記録できなかった。検出した遺構の規模は長さ6.60m、幅0.21m～0.60m、深さ0.07m～0.25mを測る。

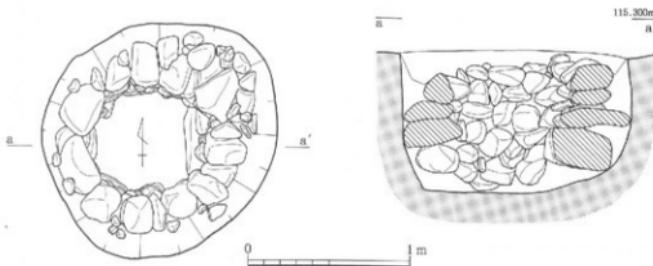
出土した遺物はなかった。

(3) 井戸

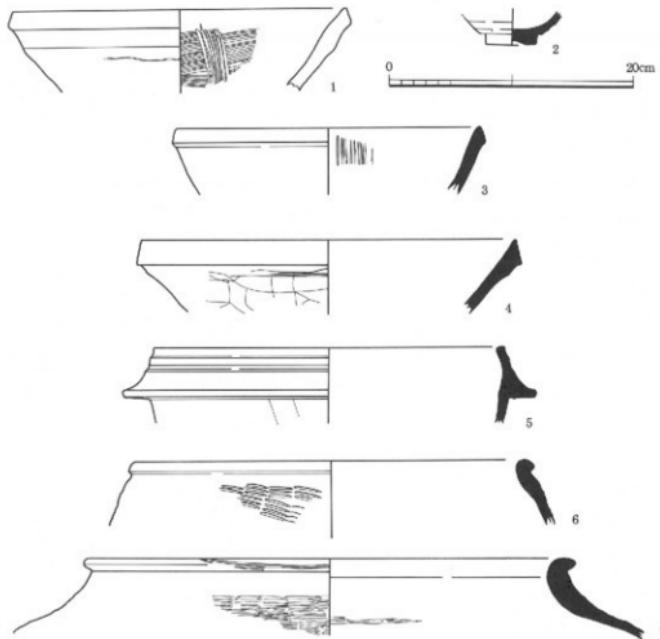
[S E 1] (第7・8図、図版5・10)

S E 1は調査区の中央部に位置する。井戸の内部は川原石を用いて組み上げている。遺構の掘方の平面形は不整形な梢円形を呈している。遺構の規模は掘方の長径1.48m、短径1.34m、石組の内径0.66m、深さ0.88mを測る。使用された川原石の規模は最大75cm×35cm×25cmを測る。

遺物は土師質土器の擂鉢(1)、瓦質土器の擂鉢(3)・練鉢(4)・土釜(5)・甕(6・7)、瀬戸美濃系の天目茶碗(2)が出土した。



第7図 S E 1 遺構実測図(1/30)



第8図 S E 1出土遺物実測図

(4) 土坑

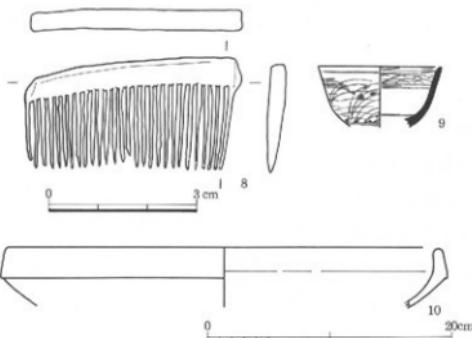
【SK 1】

SK 1はSD 2の北側を切って位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸0.68m、短軸0.56m、深さ0.08mを測る。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

【SK 2】(第9図、図版10)

SK 2は調査区中央部の北端に位置する。遺構の平面形は北側が側溝に切られ



第9図 SK 2・3出土遺物実測図

ているが、本来円形を呈していたものと見られる。遺構の規模は径1.26m、深さ0.38mを測る。

遺物は木製の櫛(8)が出土した。

〔S K 3〕(第9図、図版10)

S K 3はS E 1の北西に近接する。遺構の平面形は不整形である。

遺構の規模は長軸1.54m、

短軸1.20m、深さ0.50m

を測る。

遺物は土師質土器の炮

烙(10)、波佐見の碗(9)

が出土した。

(5)埋甕

〔S L 1〕(第10・11図、

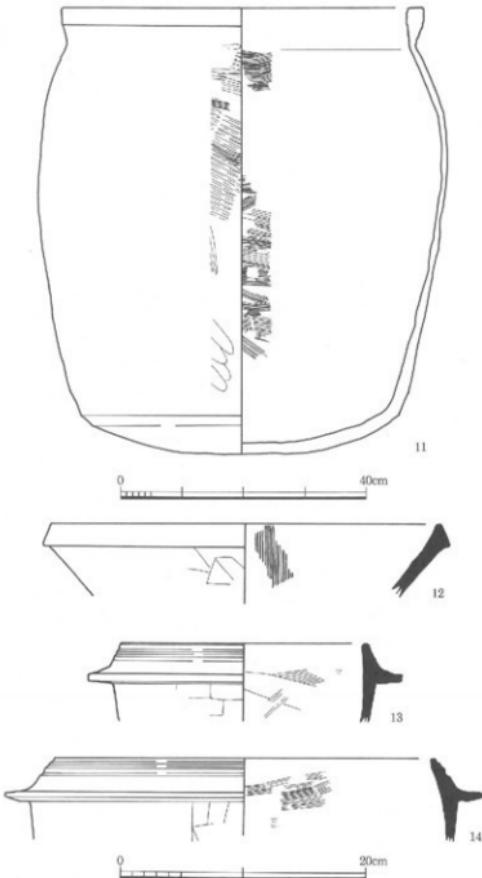
図版5・10)

S L 1は調査区の東端に位置する。遺構の掘方の平面形は円形を呈している。遺構の規模は掘方の径0.84m、深さ0.46mを測る。遺構の時期は後述するS N 1～4同様、N R 1の水の流れが一旦失われてから形成された層上に、掘方が掘られて甕(11)が埋められたことが観察できた。

埋設された甕は土師質土器である。甕の内部の埋土からは瓦質土器の擂鉢(12)・土釜(13・14)が出土した。



第10図 S L 1 遺構実測図(1/30)



第11図 S L 1 出土遺物実測図

〔S L 2〕(第12・13図、図版6・10)

S L 2は調査区の中央部に位置する。遺構の掘方の平面形は不整形な円形である。遺構の規模は径0.70m、深さ0.48mを測る。

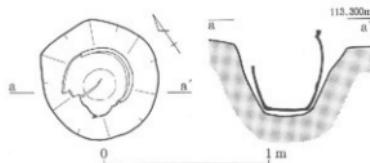
埋設された甕(16)は土師質土器である。甕の内部の埋土からは青磁の碗(15)が出土した。

(6)埋桶

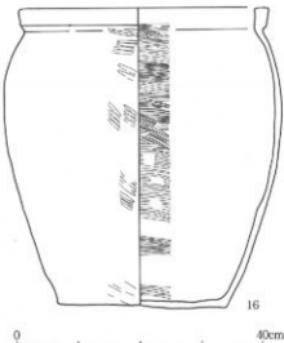


〔S N 1〕(第14・15図、図版6・11)

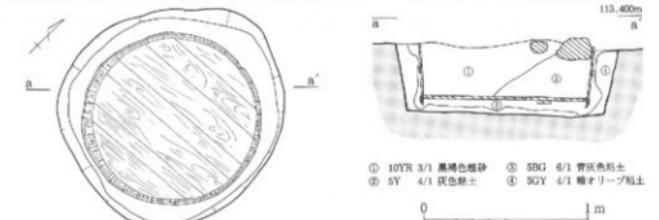
S N 1はS D 1の南端に近接する。遺構はN R 1の水の流れが一旦失われてから形成された層上に掘り方が掘られて桶(17)が埋められたのち、流水による砂によって埋没したことが観察できた。遺構の掘方の平面形は不整形な橢円形である。掘方は桶よりやや大きく逆台形に掘られている。掘方の規模は長径1.42m、短径1.30m、深さ0.40m



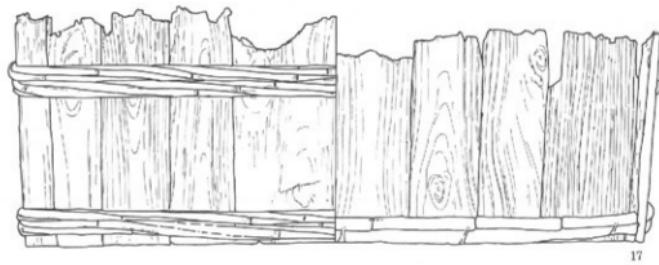
第12図 S L 2 遺構実測図(1/30)



第13図 S L 2 出土遺物実測図



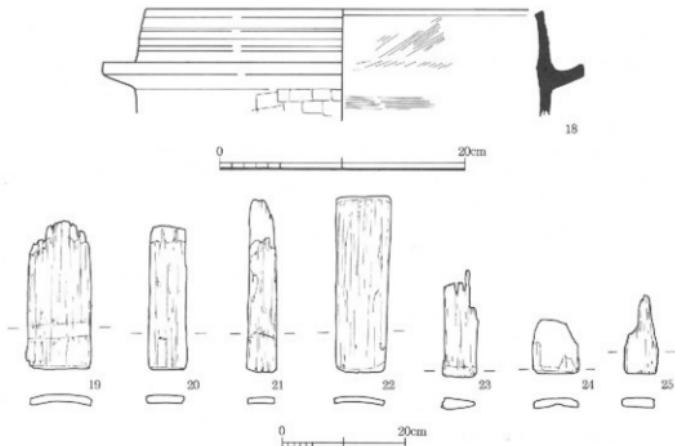
① 10YR 3/1 黒褐色粗砂
② SY 4/1 灰色粘土
③ 5G 6/1 褐灰色粘土
④ 9GY 4/1 布オリーブ粘土



17



第14図 S N 1 遺構実測図(1/30)・出土遺物実測図(1)



第15図 S N 1出土遺物実測図(2)

を測る。桶は木製で底板と側板が残存しており、側板の周囲には割竹を3本単位で編んだ籠が上下2段ある。桶の法量は径102cm、残存高38.6cm、板材の厚さ2cmを測る。

桶の掘方からの出土遺物はなかったが、桶の内部からは土師質土器の土釜・甕、瓦質土器の甕・土釜(18)、備前の甕、常滑の甕、桶側板(19~25)が出土した。(17~25)以外は細片のため図化できなかった。

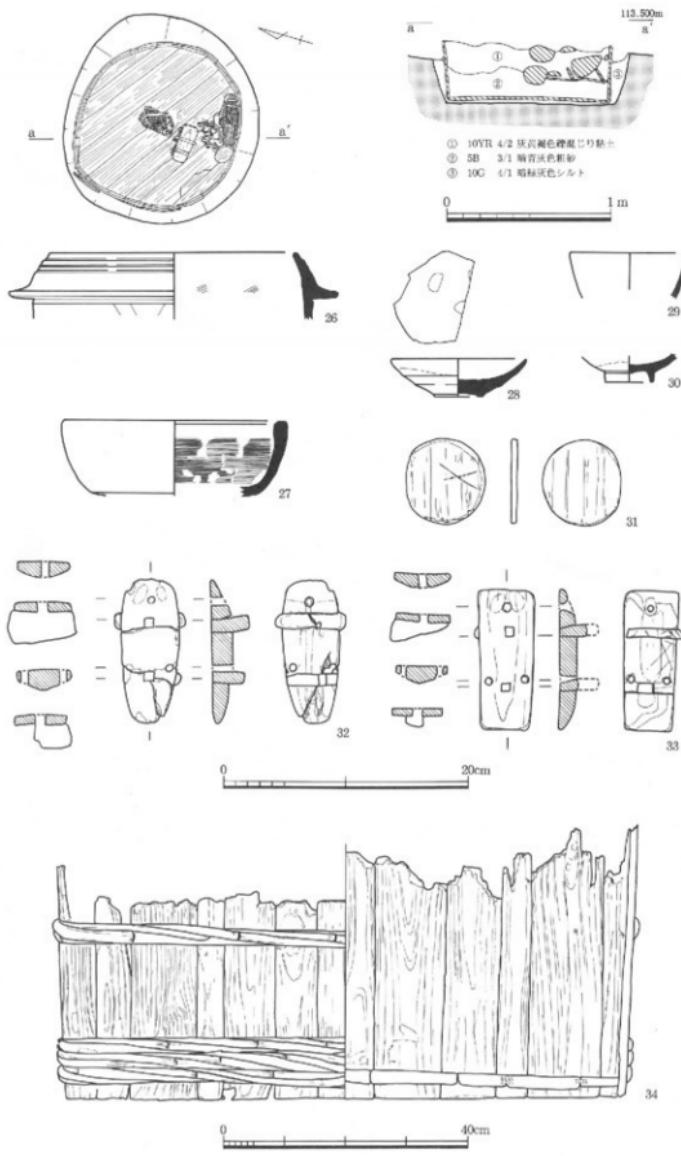
[S N 2] (第16図、図版7・11)

S N 2はS N 1の北西に位置する。遺構はN R 1の水の流れが一旦失われてから形成された層上に、掘方が掘られて桶(34)が埋められたのち、流水による砂によって埋没したと考えられる。遺構の掘方の平面形は不整形な梢円形である。掘方は桶よりやや大きく逆台形に掘られている。掘方の規模は長径1.34m、短径1.20m、深さ0.32mを測る。桶は木製で底板と側板が残存していた。S N 1と同様、側板の周囲には割竹を3本単位で編んだ籠が上下2段ある。桶の法量は径94cm、残存高44cm、板材の厚さ2cmを測る。

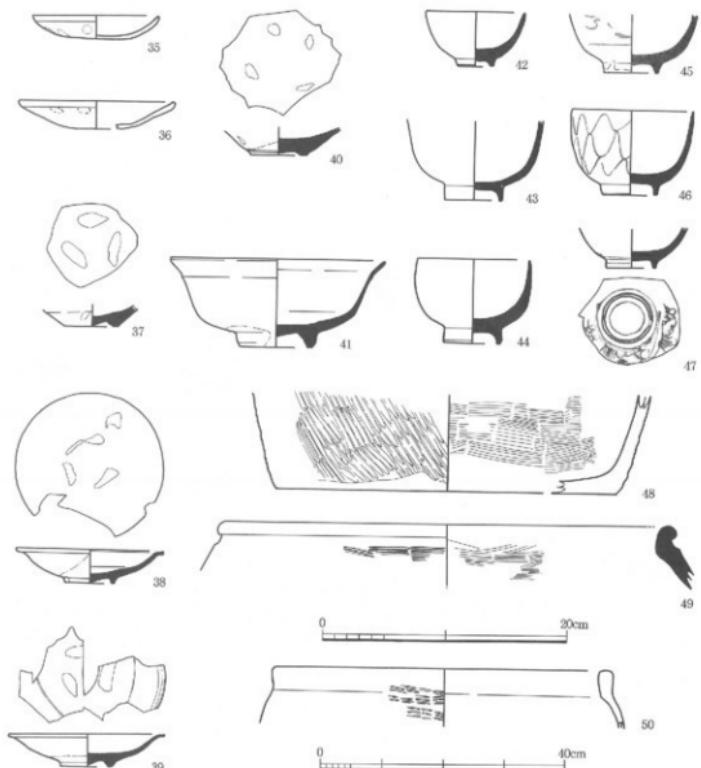
桶の掘方からの出土遺物はないが、桶の内部から須恵器の壺蓋、土師質土器の皿・甕、瓦質土器の皿・甕・土釜(26)・火鉢(27)、唐津の皿(28)・碗(30)、波佐見の碗、青磁の碗(29)、小型の曲物の底板(31)・下駄(32・33)、用途不明の網代が出土した。網代は脆弱なため取り上げができなかったが、検出状況からおそらく箕や笊のようなものであったと考えられる。

[S N 3] (第17・18図、図版7・12・13)

S N 3はS N 2の南西に位置する。遺構はS N 1・2と同様、N R 1の水の流れが一旦失われてから形成された層上に掘方が掘られて桶が埋められたのち、流水による砂によっ



第16図 SN 2 遺構実測図(1/30)・出土遺物実測図



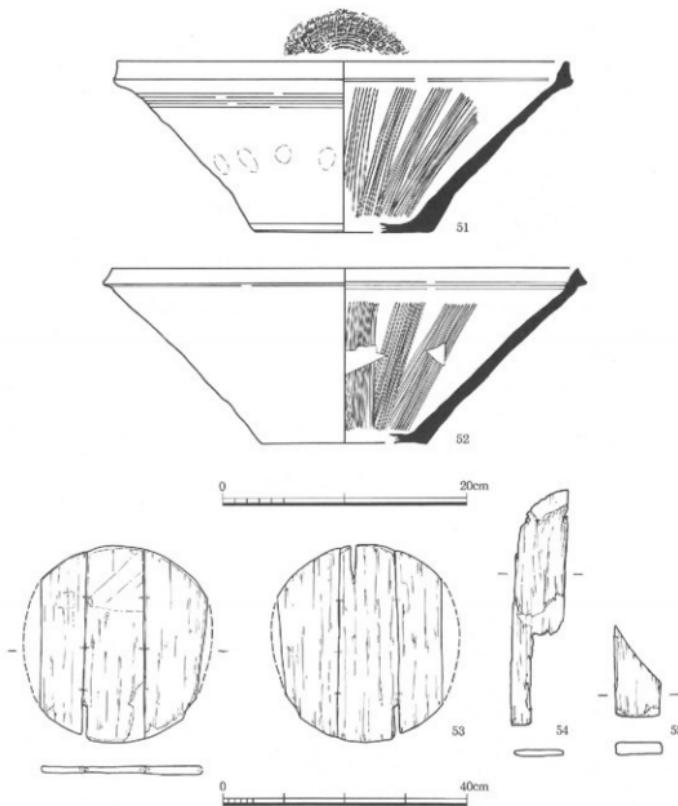
第17図 S N 3出土遺物実測図(1)

て埋没したと考えられる。遺構の掘方の平面形は不整形な円形である。遺構の中には桶の縦の割竹が2段重なって残存しており、S N 1・2と同様、桶が埋設されていたがN R 1の水の流れに底板、側板が流されたものと考えられる。

遺物は土師質土器の皿(35・36)・甕(48・50)・擂鉢・火鉢、瓦器の皿、瓦質土器の甕(49)、唐津の皿(37~39)・碗(40・43・44)、嬉野の鉢(41)、肥前系の碗(45)、波佐見の碗(46・47)、青磁の碗(42)、丹波の擂鉢(51・52)、曲物の底板(53)が出土した。(35~52)以外は細片のため図化できなかった。

[S N 4] (第18図、図版6)

S N 4はS N 3の東に位置し、S N 1の掘方に切られている。遺構はS N 1~3と同様、N R 1の水の流れが一旦失われてから形成された層上に掘方が掘られ桶が埋められたのち、流水による砂によって埋没したと考えられる。遺構の中には桶の底板が一部残存していた。



第18図 SN 3 出土遺物実測図(2)・SN 4 出土遺物実測図

おそらく、N R 1 の水の流れに桶の側板や底板のほとんどが流されたものと考えられる。

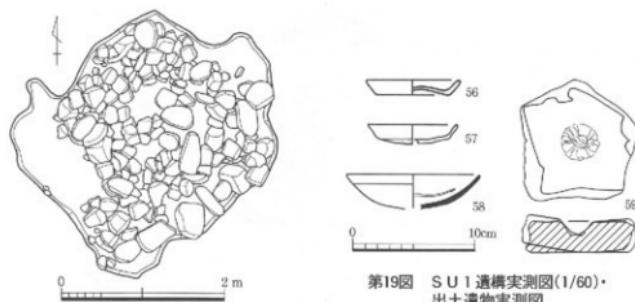
遺物は桶の側板(54・55)が出土した。

(7)集石遺構

〔S U 1〕(第19図、図版8・13)

S U 1 は S D 4 の南側に位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の内部には、川原石が意図的に並べて置かれたと見られる部分が観察できたが詳細は不明である。

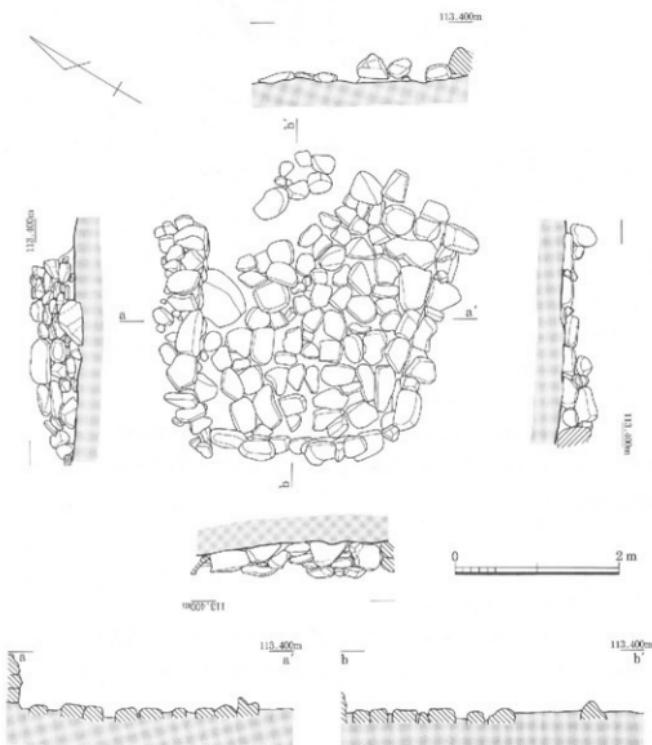
遺物は土師質土器の皿(56・57)、瓦器の塊(58)、平瓦(59)が出土した。平瓦は焼成後、中央部に穴を穿つが、用途は不明である。



第19図 SU 1 遺構実測図(1/60)・
出土遺物実測図

(8)石組遺構

[SW 1] (第20図、図版8)



第20図 SW 1 遺構実測図(1/60)

S W 1 は調査区の東端に位置する。北隅の一部の石が欠落しているが、平面形を復元すると東辺が底辺となる台形を呈しているものと見られる。遺構の掘方は N R 1 が一旦埋没したのちにおおむね第③層（第23図）の上面で掘方が掘られ、石組みが構築されたものと見られる。先述の S D 1 との関係が考えられるが、詳細は不明である。検出した石組の規模は、東辺1.77m、西辺2.25m、南辺2.79m、北辺2.70m、深さ0.65mを測る。石組に使用された石は川原石で、最大69cm×54cm×35cmを測る。河内長野市内の遺跡ではこのような方形石組遺構が、天野山金剛寺遺跡の1988年度（未報告）と1992年度（S W 7）の調査、また向野遺跡の1988年度（S W 1～5）の調査において検出されている。

石組の内部から遺物は出土しなかった。

[S W 2] (第21図、図版9・13)

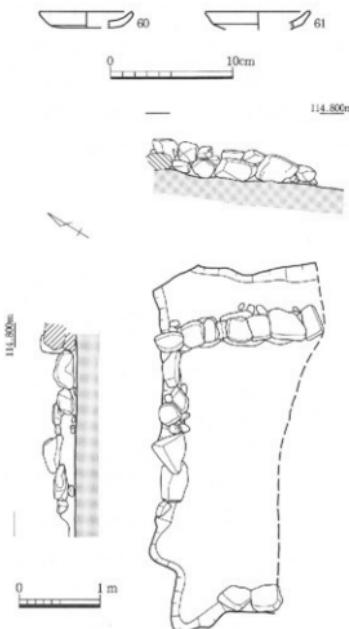
S W 2 は S K 3 の西側に位置する。遺構の掘方の平面形は歪な方形で、遺構の内側には平面的に復元するとコの字状の石列を持つ。遺構の南東部分は擾乱を受けているが、南側の遺構面の切り込み具合から、当初、方形石組遺構であった可能性も考えられる。また、遺構の北側付近では焼土層が検出されており、遺構は焼土層の形成される以前に構築されていたことが確認された。検出した遺構の規模は掘方の長軸4.6m、短軸2.05m、深さ0.27mで、石組の長軸3.7m、短軸2.1m、高さ0.3mを測る。石組に使用された石は川原石で、最大48cm×33cm×25cmを測る。

遺物は土師質土器の皿(60・61)、瓦器の塊が出土したが、瓦器は細片のため図化できなかった。先述の焼土層は、瓦器が出土したことと上層の層序から中世に形成された可能性がある。

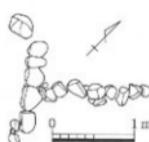
[S W 3] (第22図)

S W 3 は S W 2 の北側に位置する。遺構の平面形はT字形を呈する石列である。検出した遺構の規模は東西長1.56m、南北長1.14mを測る。石組に使用された石は川原石で、最大30cm×22cm×15cmを測る。

遺物は出土しなかった。



第21図 S W 2 遺構実測図(1/60)・出土遺物実測図



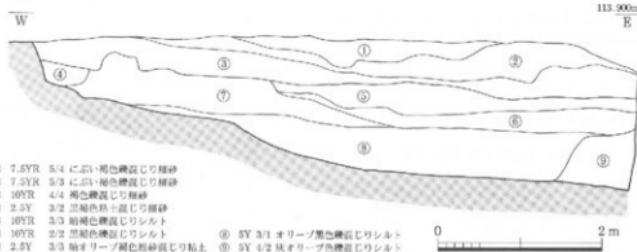
第22図 S W 3 遺構実測図(1/60)

(9)自然流路

[N R 1] (第23~26図、図版9・14・15)

N R 1は調査区の南端に位置する。検出したのは北岸のみで南岸と東西の両端は調査区外に及ぶ。流路は地形と埋土に泥層が見られることから、水は西から東へ流れ、その流れは通常緩やかであったことが観察できた。先述のS L 1・S N 1~4・S W 1はN R 1が一旦水の流れを失ったのちに構築されたことがN R 1の土層からや、桶の内部で自然堆積の砂層が検出されたこと、また桶の側板が流出していることなどから考えられる。これらの遺構面は概ねN R 1の第③層上に相当することが推測される。

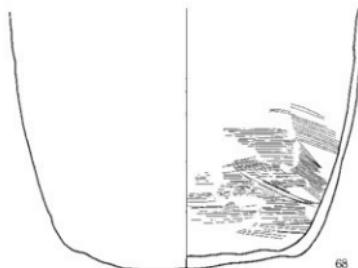
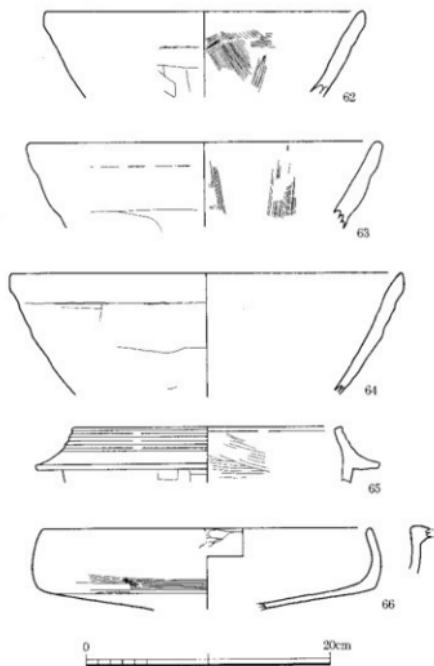
N R 1が埋没した時期を土層から概ね2期に分けることができる。出土した遺物は上層と下層に分けて取り上げた。上層は第③層と第⑤層、下層は第④層と第⑥層から第⑧層までである。上層からは土師質土器の擂鉢(62~64)・土釜(65)・炮烙(66)・甕(67・68)、瓦質土器の鍊鉢(69)・擂鉢(70)・土釜(71~75)・土管(76)、唐津の皿(77~81)・碗(89)、波佐見の碗(82・83)、肥前系の碗(84~88)が出土した。下層からは土師質土器の擂鉢(90)・土釜(91)、瓦質土器の土釜(92・93)・甕(98)、須恵質の甕(94)、唐津の碗(95)、平瓦(96・97)が出土した。



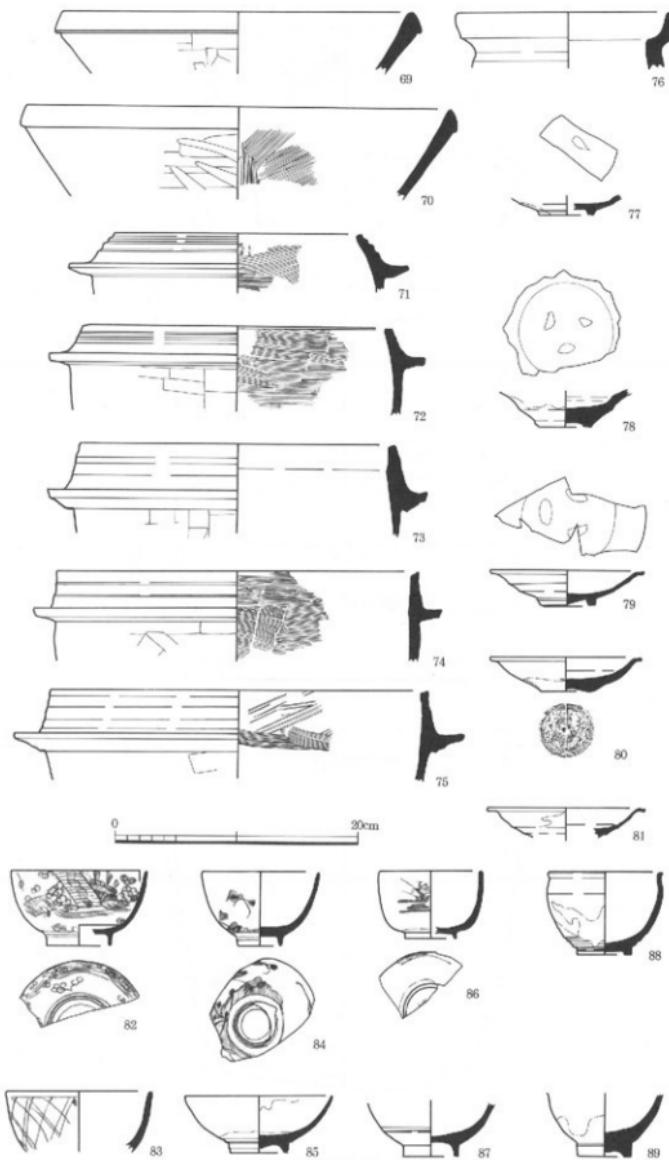
第23図 N R 1 遺構実測図(1/60)

(10)包含層(第27~32図、図版16~19)

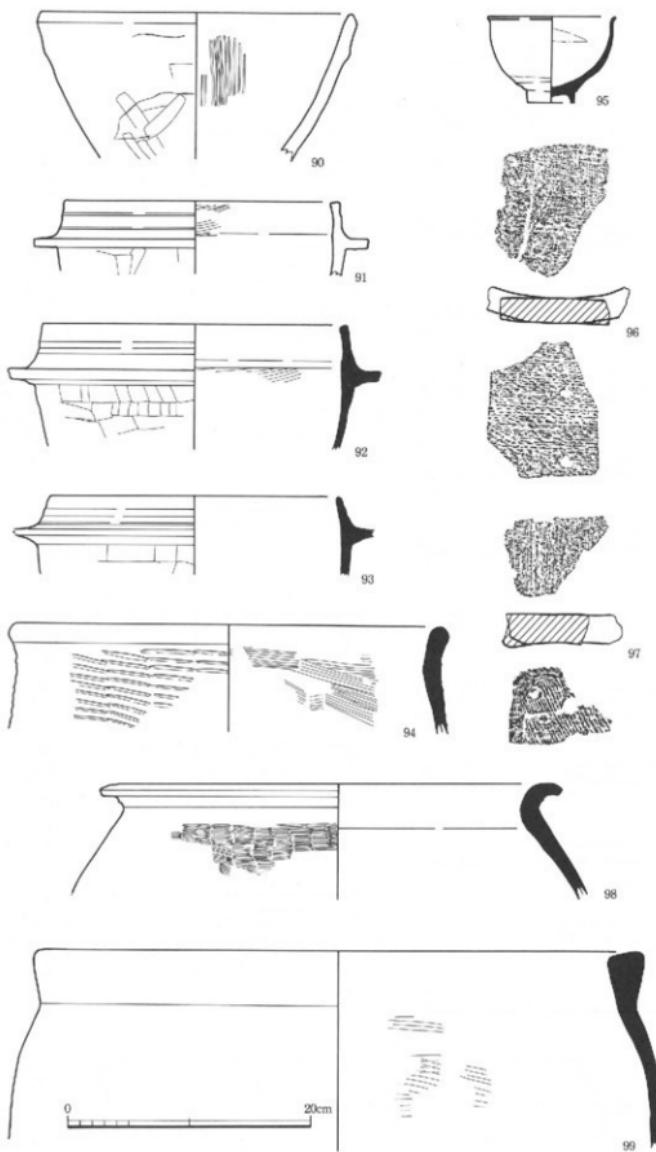
包含層からの出土遺物は第①層から第②層までの層中から出土したものである。土師器の皿(100)・甕(101)、土師質土器の皿(102~120)・擂鉢(121~123)・土鍋(124)・土釜(125~129)・甕(130~134)・炮烙(135~141)・火鉢(142~145)・香炉(146)、瓦器の塊(147~152)、瓦質土器の皿(153~166)・練鉢(167・168)・擂鉢(169~173)・土釜(177~182)・甕(183~185)・火鉢(186)、東播系の須恵質土器の練鉢(174~176)、瀬戸の坏(187)、嬉野の皿(193)、唐津の皿(188~192)・碗(197~201)・鉢(204)、青磁の碗(194)、波佐見の碗(195)、瀬戸美濃系の碗(196)、丹波の擂鉢(205・206)、撚の擂鉢(207・208)、備前の壺(203)・甕(209)、常滑の甕(210)、陶器の釜(202)、軒丸瓦(211)、軒平瓦(212)、契斗瓦(213)が出土した。その他には包含層やN R 1の上層・下層からサヌカイト製の複刃削器、弥生時代中期の甕・甕・鉢が出土したが、詳細は第2節で後述する。



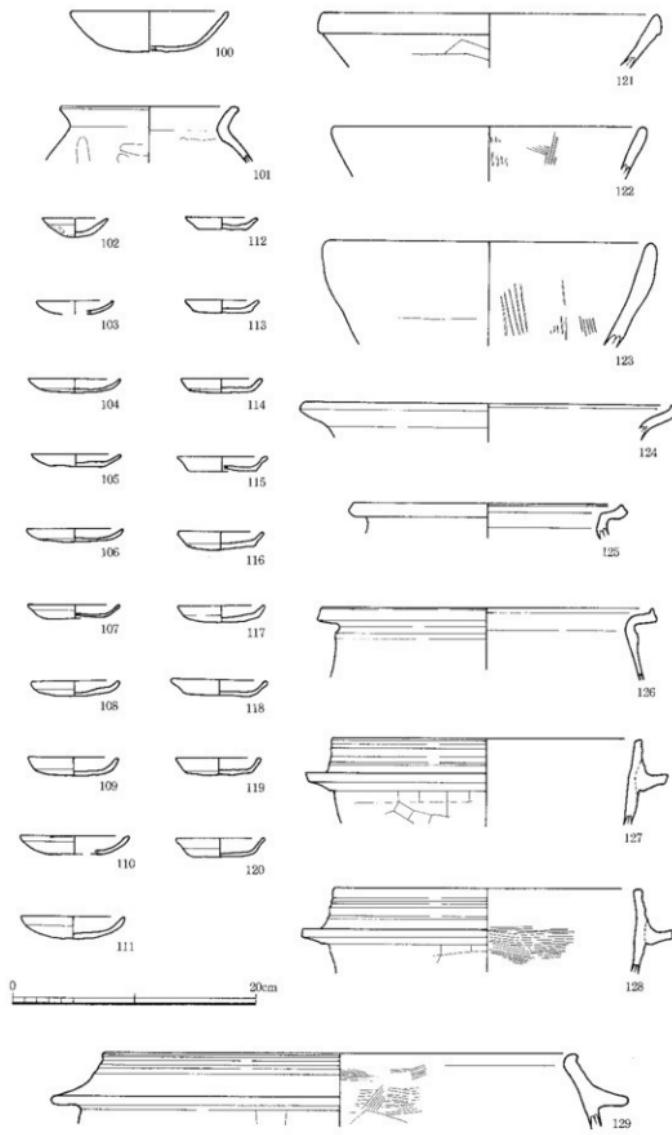
第24図 NR 1上層出土遺物実測図(1)



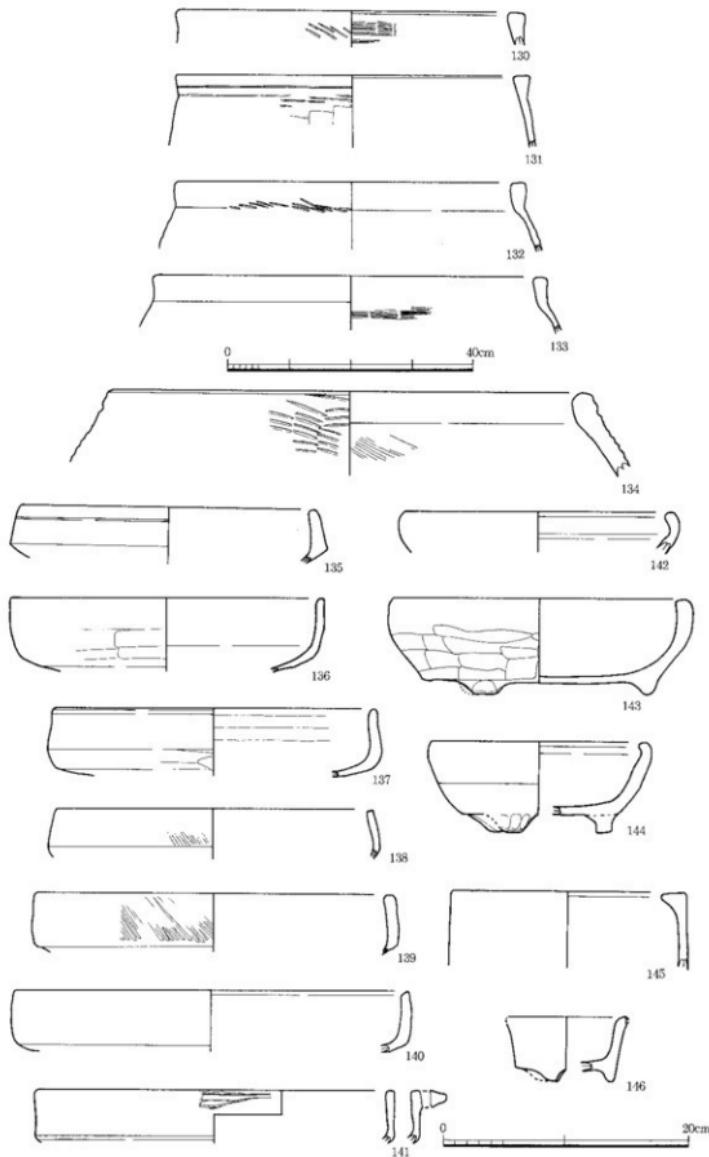
第25図 NR 1 上層出土遺物実測図(2)



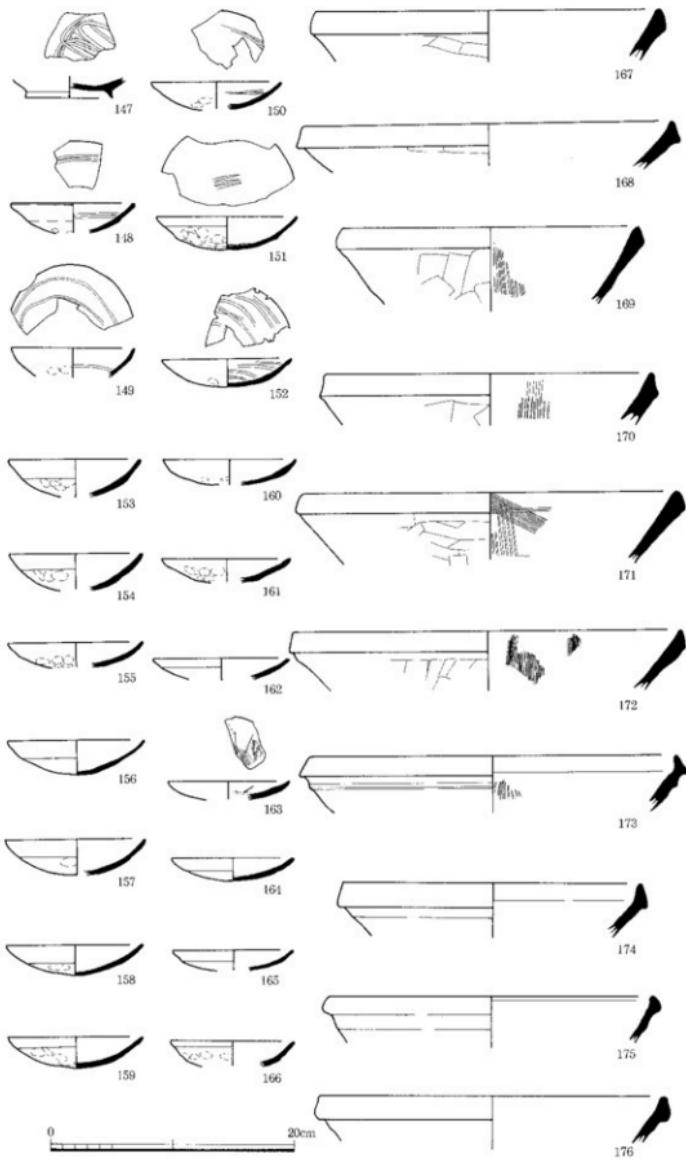
第26図 NR 1 下層出土遺物実測図



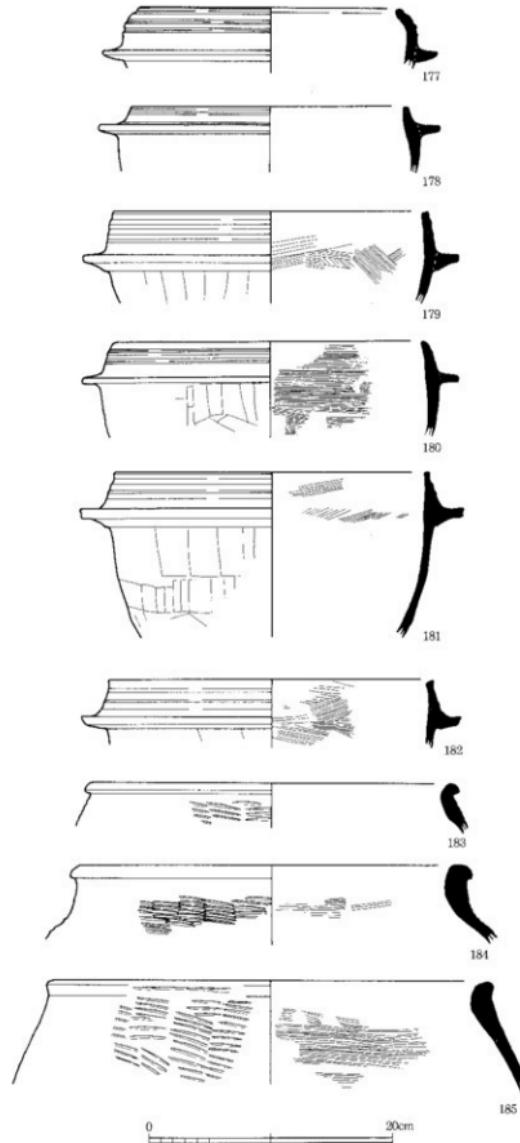
第27図 包含層出土遺物実測図(1)



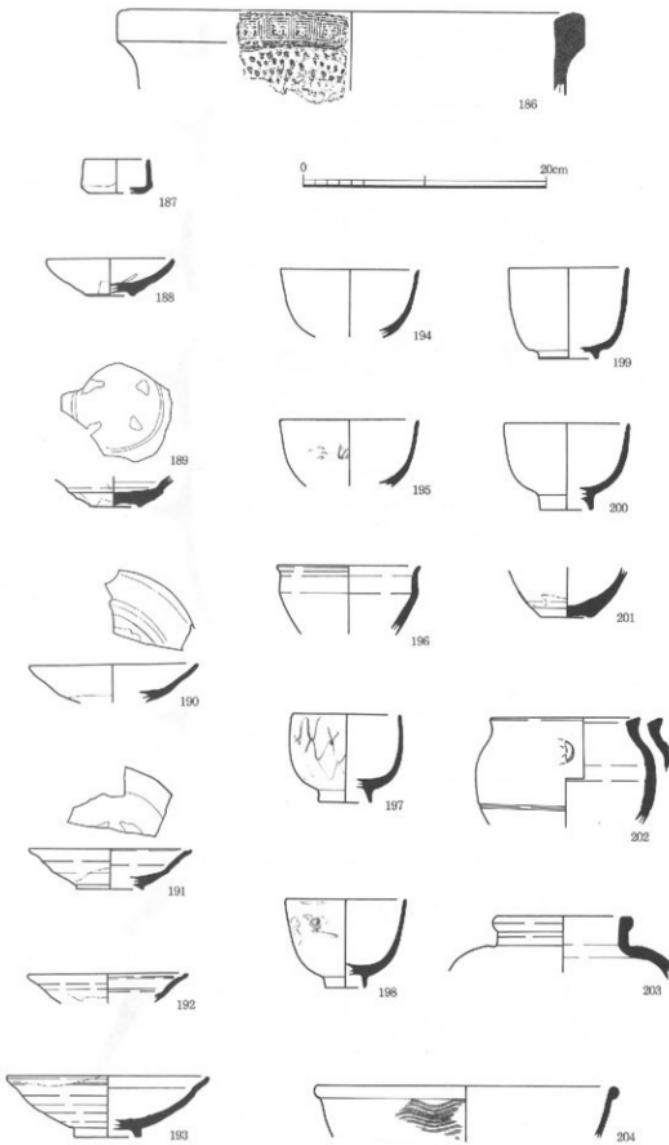
第28図 包含層出土遺物実測図(2)



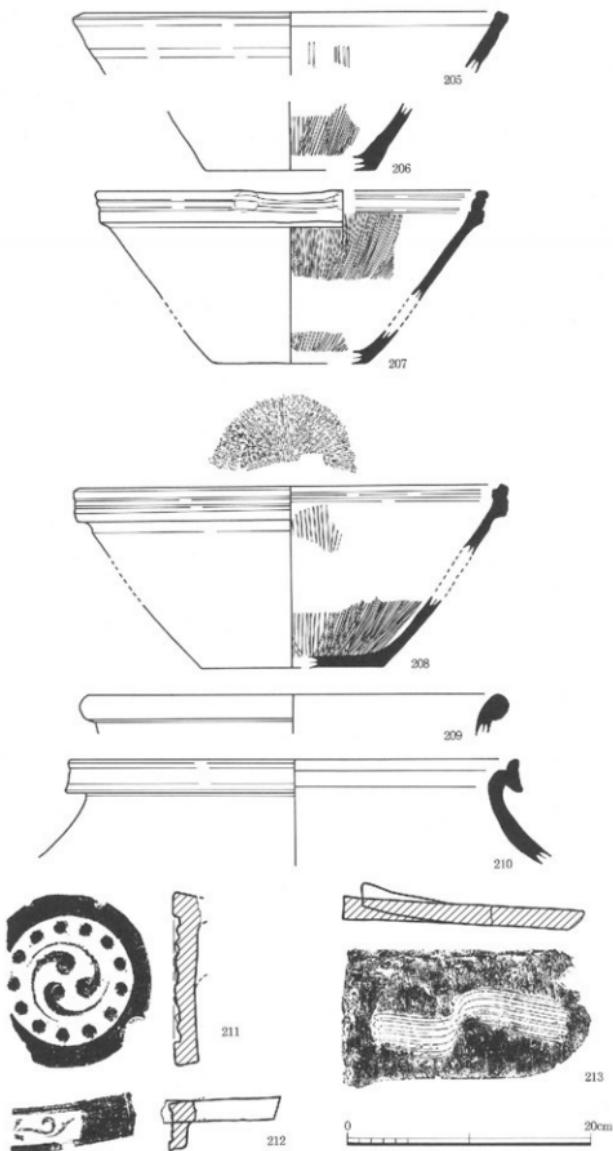
第29図 包含層出土遺物実測図(3)



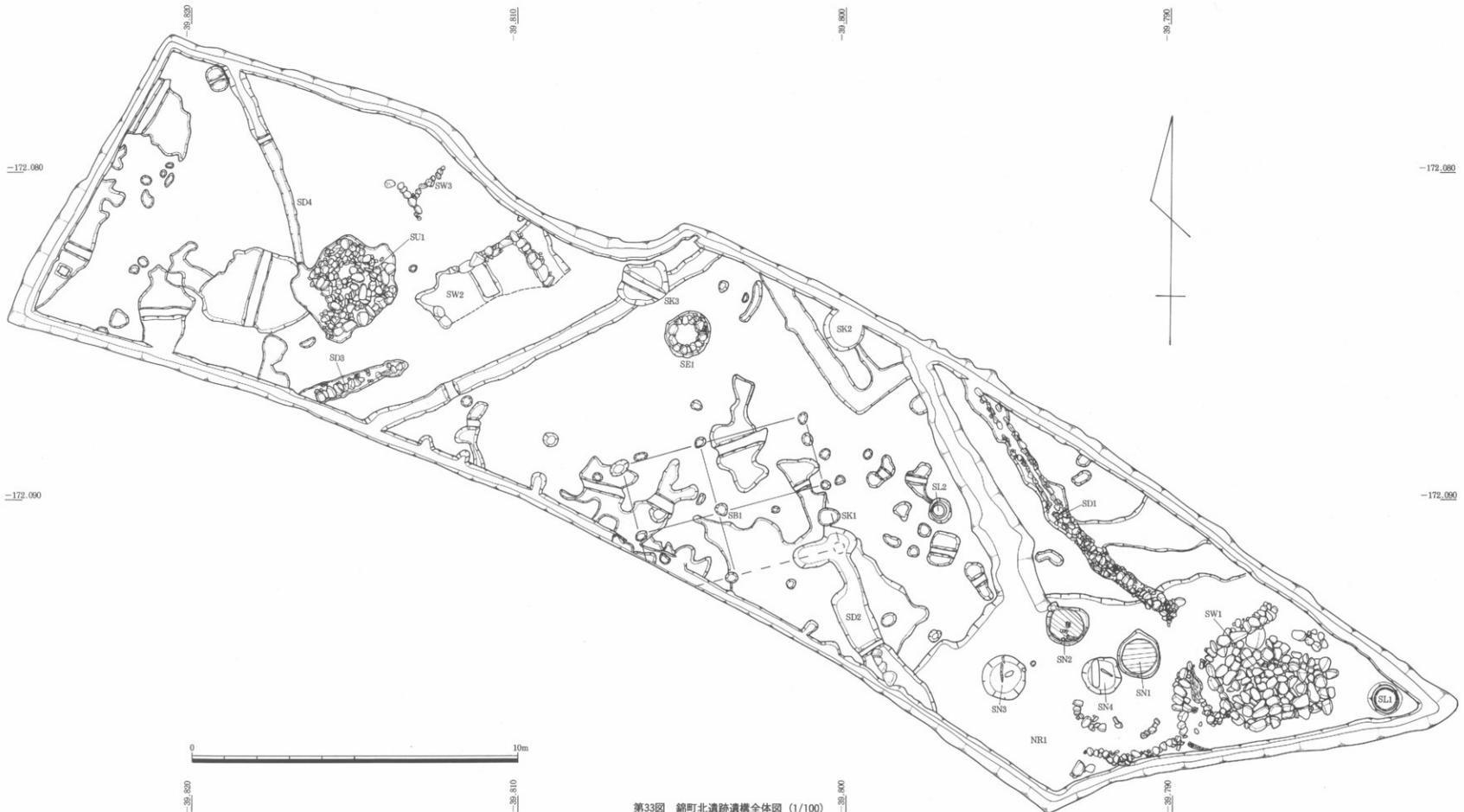
第30図 包含層出土遺物実測図(4)



第31図 包含層出土遺物実測図(5)



第32図 包含層出土遺物実測図(6)



第33図 錦町北遺跡遺構全体図 (1/100)

第2節 遺物

今回の調査で土器類は弥生土器から近世陶磁器類まで出土した。また、木製品では櫛・下駄・桶などがある。他に、瓦が若干出土している。石器は包含層から出土した複刃削器が1点出土しているだけである。

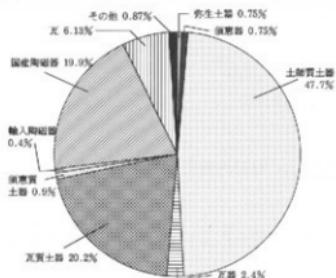
(1) 土器

出土土器の全体構成はグラフ1のとおり土師質土器が一番多く、瓦質土器、国産陶磁器とつづいている。この傾向は遺構出土の構成も包含層出土の構成も変化しない。

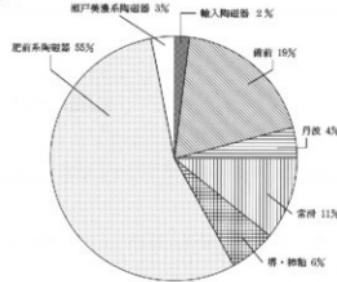
国産陶磁器の出土構成はグラフ2のように圧倒的に肥前陶磁器が多く、55%を占める。つづいて備前、常滑、堺、丹波、瀬戸美濃、輸入陶磁器の順である。この傾向は時代、出土地の位置によって決定されるようである。

遺構	包含層	その他	計
弥生土器	11	2	13
須恵器	4	9	13
土師質土器	133	692	825
瓦器	6	35	41
瓦質土器	77	273	350
須恵質土器	0	16	16
輸入陶磁器	2	4	6
国産陶磁器	72	272	344
瓦	5	101	106
その他	5	10	15
計	315片	1414片	1729片

輸入陶磁器	6
備前	66
丹波	17
常滑	38
堺・神助	20
肥前系陶磁器	194
瀬戸美濃系陶磁器	10
計	350片



グラフ1



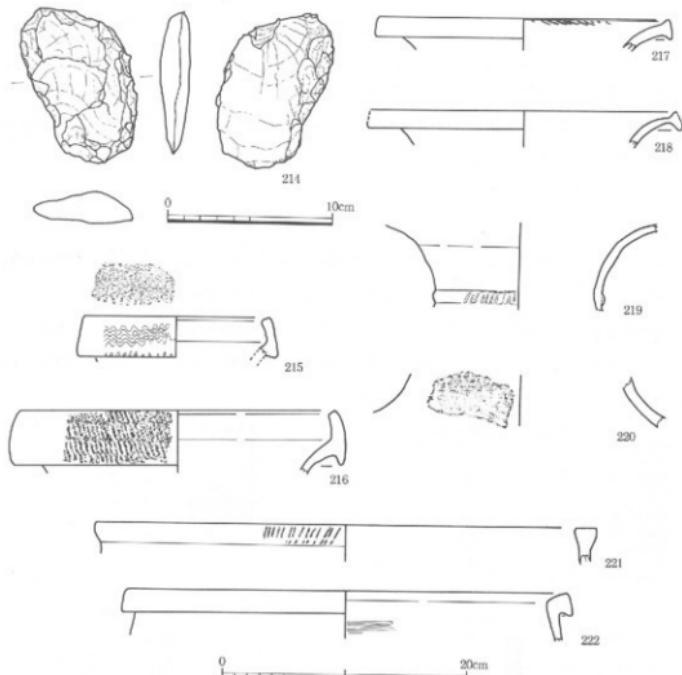
グラフ2

第2表 出土遺物の分類

[弥生土器]

器種は壺形土器・鉢・甌である。N R 1と包含層から出土している。

壺 (215) は口縁端部が上方向に拡張されて波状文が施され、その下端に刻み目が見られる。(216) は口縁端部が上方向と少し下方向に拡張されており、櫛描き列点文が4段に施されている。(217) の口縁部は横方向に屈曲し端部は上下にわずかづつ突出する。内面に櫛描き列点文が施されている。(218) も同様に端部が上下に突出し面をなす。(219) は口頸部で、基部に粘土帯を貼りつけ、その上にヘラによる刻み目が施されている。(220) は



第34図 弥生土器・石器実測図

体部で、廉状文が施されている。

鉢 (221)は口縁端部が内外に肥厚し、面を成す。口縁部外面に櫛描き列点文が見られる。

壺 (222)は口縁部が屈曲し、口縁端部は下方向に拡張されている。生駒西麓の胎土である。

〔須恵器〕

細片が遺構と包含層から出土している。しかし、実測可能なもの及び時期の判明するものは出土しなかった。

〔土師器〕

包含層から2点出土している

壺 (100)は底部から外上方にのび、口縁端部はそのまま納められている。内外面とも調整は不明。

壺 (101)は口縁部が「く」の字に外反し、口縁端部は内傾する面をもつ。口縁部には煤が付着する。

〔黒色土器〕

A類が出土している。しかし、実測可能なものは出土しなかった。

〔土師質土器〕

■ 1類から4類に大別できた。1類は包含層出土の(102)だけである。色調が白色系で口径5.3cmの小さなものである。2類はSN3出土の(36)で口径12.7cmと大きい。底部から外窯気味に外傾し口縁部にいたる。色調は白色系である。3類はSN3出土の(35)、包含層出土の(103~106・108~111)が該当する。底部が平底気味で口縁部は短く内窯して外傾する。(35・104・110)の口縁部には煤が付着している。4類はSW2出土の(60・61)、SU1出土の(56・57)、包含層出土の(107・112~120)が該当する。平底の底部から口縁部が短く屈曲し外傾する。

擂鉢 1類と2類に分類できる。1類はSE1出土の(1)、包含層出土の(121)で、口縁端部は内傾する面を成し、断面が三角形である。(121)は練鉢の可能性がある。2類よりは比較的丁寧なつくりである。2類はNR1出土の(62・63・90)、包含層出土の(122・123)で体部が丸みをもち、口縁部も丸い。外面調整はナデ及びヘラ状工具によるナデが見られる。つくりは雑である。

土釜 いずれも羽釜で1類から4類に大別できる。1類はNR1出土の(91)や包含層出土の(127・128)で口縁部が直立してのび、鍔は断面が方形で端部が面を成す。(91)は鍔が水平にのびる。2類はNR1出土の(65)や包含層出土の(129)で口縁部が内傾し、端部は外方向に少し撮み出している。鍔は上面がゆるやかに内傾し端部が丸い。3類は大和型の土釜で包含層出土の(125)が該当する。口縁部は「く」の字に屈曲し、口縁部は断面方形に肥厚する。4類はいわゆる紀伊型の土釜で包含層出土の(126)が該当する。口縁部は外方向に屈曲し端部は上方に撮み上げられている。1類から2類は体部外面がヘラケズリ、内面はハケメが施されている。

土堀 包含層出土の(124)だけである。口縁部が大きく外傾し、端部を少し撮み上げている。

甕 1類と2類に分類できる。1類は口縁端部が水平な面を成すもので、その中でもSL2出土の(16)のように口縁部が断面方形に肥厚するものとSL1出土の(11)、SN3出土の(50)、NR1出土の(67)、包含層出土の(130~133)のように口縁部が断面逆台形になるものとに分かれる。2類は包含層出土の(134)で、口縁部は体部からそのまま丸く終わっている。1類、2類ともに体部外面が荒いタキ、内面がハケによる調整が施されている。

炮烙 1類から4類に大別できる。1類はSK3出土の(10)と包含層出土の(135)で口縁部がするどく屈曲し稜を成し内傾するものである。2類はNR1出土の(66)で口縁部と体部の境が丸みを帯び、口縁部が内窯しながら内傾するものである。これには両耳が付いている。3類は包含層出土の(137~139)で口縁部がやや内傾するものもある。(138・139)の口縁部にはカキアゲの痕跡がある。4類は包含層出土の(136・140・141)で口縁部がやや内窯気味に立ち上がるるものである。底部はヘラケズリが顕著である。(141)は両耳

がついている。全ての炮烙の外面には煤が付着している。

火鉢 1類と2類に分類できる。1類は包含層出土の(142~144)で、胴丸型で口縁端部は丸く内傾気味に成る。平底の底部に3脚が付く。体部下半外面はヘラケズリ、その他はナデによる調整が施されている。2類は包含層出土の(145)で筒形の体部を持ち、口縁部は内側に肥厚し上面が平坦面を成す。

香炉 包含層出土の(146)の1点である。底部から少し外反気味に立ち上がり、口縁端部は丸い。平底の底部に3脚が付く。

〔瓦器〕

塊 1類と2類に分類できる。1類は包含層出土の(147)で、高台を有し、底部内面には螺旋状の暗文が施されている。尾上編年のII-2~3の型式のものである。2類はSU1出土の(58)、包含層出土の(150~152)である。口径10cmから11cm、器高が2.5cmから3cmで、内面に荒い暗文が施される。尾上編年のIV-4の型式のものである。

〔瓦質土器〕

皿 1類から5類に大別できる。この分類は天野山金剛寺出土の土釜埋納土器の分類に準拠する^(註1)。1類は包含層出土の(153・154・156・157)で、口径11cm、器高3cmのに近い形態である。尾上編年のIV-4の型式で暗文を施さないものである。2類は包含層出土の(158・159・166)で、口径は1類より3mm程度大きく器高が3mm程度低く皿の形態に近づいている。3類は包含層出土の(155)で、2類よりも器高が平均3mm低い。内面にヘラ状工具によるナデが施されている。4類は包含層出土の(160~162)で、3類よりも口径が平均5mm小さく器高が3mm低くなる。内面にヘラ状工具によるナデが施されている。5類は包含層出土の(163~165)で、4類よりも口径が平均5mm小さく器高も5mm低くなる。内面調整は荒いハケ及びヘラ状工具によるナデが見られる。

練鉢 SE1から1点(4)、包含層から2点(167・168)実測できた。(167)は口縁部が内弯しながら内傾し端部は丸い。体部外面はヘラケズリが施されている。(4)と(168)は口縁部が内傾し、下方向に少し肥厚し断面三角形を呈する。体部外面はヘラケズリが施されている。

擂鉢 口縁部の処理から2類に分類できる。1類はSE1出土の1点(3)、包含層出土の3点(169~171)で体部から口縁部が内傾するが、肥厚はしない。2類はSL1出土の(12)、NR1出土の(70)、包含層出土の(172・173)で体部から口縁部が内傾し、下方に若干肥厚する。いずれも体部外面はヘラケズリが成されている。

土釜 いずれも羽釜で1類から3類に大別できる。1類はSL1出土の(13)、SN1出土の(18)やNR1出土の(73~75)や包含層出土の(179・181)で口縁部が直立気味にのび端部が内傾する面をもつ。2類はSE1出土の(5)やSL1出土の(14)、SN1出土の(26)、NR1出土の(71・72・93)や包含層出土の(178・180)で口縁部は鶴から続いて内弯し、端部は平坦面を成すものと丸くおさめられるものとがある。(178)は口縁部が短い。3類は

包含層出土の(177)が該当する。口縁部はまっすぐ立ち上ったのち、「く」の字に内傾し端部は丸い。

甕 1類と2類に分類できる。1類はS E 1出土の(7)、N R 1出土の(183・184)で口縁端部が據みだしたように短く外反する。2類はS E 1出土の(6)、包含層出土の(185)で玉縁状のもの。3類はN R 1出土の(98)で口縁部が短く外反しさらに外弯する。4類はN R 1出土の(99)で口縁部端が面を成すもので、断面が逆台形を呈する。

火舎 S N 2出土の(27)は底部から内弯気味に外傾する。外面はヘラミガキ、内面はハケメが施されている。包含層出土の(186)は口縁部が平坦な面を成し、断面が長方形を呈する。口縁部外面に、雷文の中に「芳」の字があるスタンプが打捺されている。また体部外面は珠文が施されている。

〔東播系須恵質土器〕

練鉢 包含層出土の(174～176)いずれも口縁部近くで、上方向と下方向に拡張されている。(175)のみ下方向への拡張が弱い。

(2) 国産陶磁器

〔肥前陶磁器〕

唐津系陶器四 灰釉が施され口縁部の形態からは3類に分類される。1類はS N 2出土の(28)や包含層出土の(188)で高台部からそのまま内弯気味に外傾し、口縁端部はそのまま終わる。体部、底部外面はヘラケズリが施されている。高台部はケズリだされているが明確な高台を成していない。体部、底部は露胎である。2類は包含層出土の(191・192)で底部から外傾し、口縁部はやや内弯気味にさらに外傾する。口縁部内面は凹面をなす。いわゆる折縁皿である。体部、底部外面はヘラケズリが施されている。高台部はケズリだされている。体部、底部は露胎である。3類はS N 3出土の(38・39)やN R 1出土の(79～81)で底部からやや内弯気味に外傾し、口縁部は外折する。いわゆる溝縁皿である。体部、底部外面はヘラケズリが施され、高台部はケズリだされている。体部、底部は露胎である。3類とも見込みに3ヶ所の砂目積みの痕跡を残している。また、S N 3出土の(37・40)やN R 1出土の(78)、包含層出土の(189)など上記以外に底部のみ出土している。いずれもケズリだし高台で、高台からそのまま体部が立ち上る。見込みに砂目積みの痕跡が残る。

唐津系陶器碗 S N 3出土の(43・44)や包含層出土の(199・200)は口縁部が底部からやや内弯気味に立ちあがる。全面施釉で置付け部分は露胎である。S N 3出土の(43・44)は献上手である。N R 1出土の(95)は天目形を成す。口縁部は外反し器壁は薄い。底部から高台にかけては露胎である。S N 2出土の(30)は高台部分のみで露胎である。見込みに白濁した灰釉が見られる。N R 1出土の(89)も体部下半から高台部分で、大部分が露胎である。見込みには長石釉がかけられている。包含層出土の(201)は体部下半から底部で、高台は高台内をケズリだしただけのもので露胎である。青磁釉が施されている。

唐津系陶器鉢 包含層出土の(204)は体部上半から口縁部でのみ、口縁部は玉縁状を呈する。体部外面に二彩の刷毛目が施されている。

唐津系青磁碗 S N 3 出土の(42)は、小型の碗で畳付けのみ釉を搔き取っている。

嬉野系陶器皿 包含層出土の(193)は高台の付く底部からやや内窵気味に外傾し、口縁部は更に外傾する縁反り皿である。口縁部から内面に銅緑釉が施釉されている。見込みは蛇の目釉割ぎがなされている。

嬉野系陶器鉢 S N 3 出土の(41)は高台の付く底部から外上方に外傾し、口縁部は更に外傾する縁反りである。体部外部から内面に青緑釉が施釉されている。見込みは蛇の目釉割ぎがなされている。

波佐見系磁器染付碗 S K 3 出土の(9)、S N 3 出土の(45~47)、N R 1 出土の(82・83)、包含層出土の(195)は丸碗で、高台のある底部から内窵気味にやや外傾して立ちあがる。

その他肥前系陶器碗 N R 1 出土の(86)は京焼風陶器で高台は鋭くケズリ、中央部に「新」の刻印がなされている。同じく(88)は、天目形の碗である。高台と体部下半は露胎となっている。(87)は高台畠付け部分の釉をケズリ取っている。体部外面は刷毛目?が見られる。

その他肥前系陶器皿 N R 1 出土の(85)は、灰釉が底部外面付近を除き施釉されている。しかし見込みは蛇の目釉割ぎがなされている。

その他肥前系磁器碗 N R 1 出土の(84)は染付碗で丸みを帯びている。

[瀬戸・美濃系]

陶器碗 S E 1 出土の(2)と包含層出土の(196)は天目形で、(2)は内反の高台である。

陶器小壺 包含層出土の(187)は、平底のもので体部はやや内傾する。底部及び体部下半は釉をケズリ取っている。

陶器釜 包含層出土の(202)は、丸みを帯びた体部から口縁部は短く外反する。口縁端部は内傾した面をなす。肩部に一对の把手を付ける。

[常滑]

壺 包含層出土の(210)は口縁部は折り返され、約3cmの縁帶部が形成される。

[備前]

壺 包含層出土の(203)は口縁部が肩部から直立し、口縁端部は玉縁状を成す。

壺 包含層出土の(209)は玉縁の口縁部である。

[丹波]

擂鉢 S N 3 出土の(51)は外傾した体部から口縁部が直立気味に立ち上がる。擂目は7本を数える。S N 3 出土の(52)も外傾した体部で、口縁部は断面三角形を成す。内面の擂目は10本を数える。包含層出土の(205)は口縁端部が内傾した面を成す。擂目は4本を数える。同じく包含層出土の(206)は、底部のみで擂目は7本を数える。

〔堺〕

擂鉢 包含層出土の(207・208)は体部外面をヘラケズリしている。(207)の口縁部はやや歪である。

〔磁器〕

青磁碗 S L 2 出土の(15)は、体部から外上方にまっすぐにのびる口縁である。S N 2 出土の(29)も体部から外上方にまっすぐにのびる口縁であるが、端部はやや鋭い。包含層出土の(194)は丸碗型の体部で、貫入が内面、外面に見られる。

(3)木製品

櫛 S K 2 出土の(8)は柘製で残存長4.4cm、歯の長さ1.4cm～1.7cmを測る。

下駄 S N 2 から(32・33)が出土した。(32)は小判型のもので、台の溝に柄孔を開け、歯の柄を差し込む露卯下駄である。(33)は長方形の露卯下駄である。それぞれ鼻緒を通すための眼が前後に穿たれている。どちらも、後ろの孔は後歯の前に開けられている。

桶 S N 1 出土の(17)も S N 2 出土の(34)も、下半部のみ残存していた。寸法は(17)が102cmを測り、(34)が94cmを測る。いずれも、残存部分の底部付近と上部に細く割った竹をより合わせた箋がはめられている。

その他 S N 2 出土の(31)は曲物の底板と思われる。S N 3 出土の(53)は小型の桶の底板、(54・55)も桶の一部と思われる。

(4)瓦

軒丸瓦 包含層出土の(211)は巴文で瓦当の厚みは薄い。

軒平瓦 包含層出土の(212)は唐草文である。

熨斗瓦 包含層出土の(213)は埋設用で櫛描文が描かれている。

(5)まとめ

上記の遺物、特に遺構出土の土器類から、その時期的傾向を見てみると大きく3期に分けることができる。1期は弥生時代中期、特に畿内第III様式から第IV様式を中心とするものである。2期では中世土器、特に瓦器で尾上編年のII-2～3の型式が包含層から、IV-4の型式が遺構のS U 1 から出土している。3期になると近世前半(17世紀中から18世紀初)の遺物が中心となっている。特にS N 2 は肥前陶磁器の大橋編年のII-1期からIII期に該当する。他の遺構もほぼこの時期で、包含層には18世紀後半の陶磁器も見られる。

(註1) 河内長野市遺跡調査会 1994年3月『河内長野市遺跡調査会報告 天野山金剛寺遺跡』

第3章 まとめ

調査の結果、検出した遺構、遺物から遺跡の営みが3期に区分されることがわかった。まず1期は弥生時代中期(畿内第III~IV様式)で、遺構は未検出であるが、この時期に相当する土器のみが出土した。したがって、この時期における遺跡の性格までを復元するには至らなかった。しかし、南側0.1kmに近接する栄町遺跡では弥生時代中期の墳墓が存在する可能性があり、石川左岸の低位段丘上に位置する同時期の遺跡として、遺跡間の関係が注目される。

次に2期の中世の遺構についても、検出した遺構がS U 1のみであることから、何らこの時期における遺跡の性格を復元できる資料は得られなかった。

最後に3期の近世前期の遺構については、S B 1を中心とした溝、井戸、埋甕、埋桶、石組などの遺構が、遺構間に適度の空間を保ち配置されているように観察される。これらは日常的な生活施設の種類が一揃いしていることから屋敷地を構成しているものと考えられる。

これらの近世前期の遺構を考えるにあたっては、参考となる市内遺跡に膳所藩河州出張所跡と河内西代藩陣屋跡が挙げられる。膳所藩河州出張所跡は本次調査地の北東0.6kmに位置し、慶安4年(1651)から明治維新まで近江膳所藩の河州出張所として置かれた。河内西代藩陣屋跡は同じく北0.2kmに位置し、陣屋は正徳元年(1711)から伊勢神戸に転封の享保17年(1732)まで続いた。位置的に両遺跡は本遺跡に近接しており、また本次調査で遺構から出土した遺物の時期がこれらの陣屋の営まれた時期と合致することから、検出した遺構は藩関係の可能性が考えられる。しかし、本次調査の結果では単に屋敷地と考えされること以外は不明である。

また遺物については、同時期でかつ市内遺跡への陶磁器類の主な供給元の一つと考えられている堺環壕都市遺跡との比較を試みた。比較資料は一般的な町屋出土の陶磁器類で、当遺跡の位置する地理的、社会的、経済的環境等は異なるが、単に同時期の遺跡であるという視点でのみ観察した場合、器種構成、質、量についても殆ど差異がない^(註1)ことが判明した。

いずれの時期も今後の調査によって資料が増加し、遺跡の性格が明らかになることが望まれる。

(註1) 平成7年7月29日に河内長野市遺跡調査会にて行われた関西近世考古学研究会の例会時に、森村健一氏(甲子教育委員会)、嶋谷和彦氏(同)、坪之内徹氏(奈良女子大学)をはじめ、研究会の会員の方々から教示を得た。

図 版



調査風景



調査区全景（東から）



調査区全景（西から）



調査区全景（真上から）



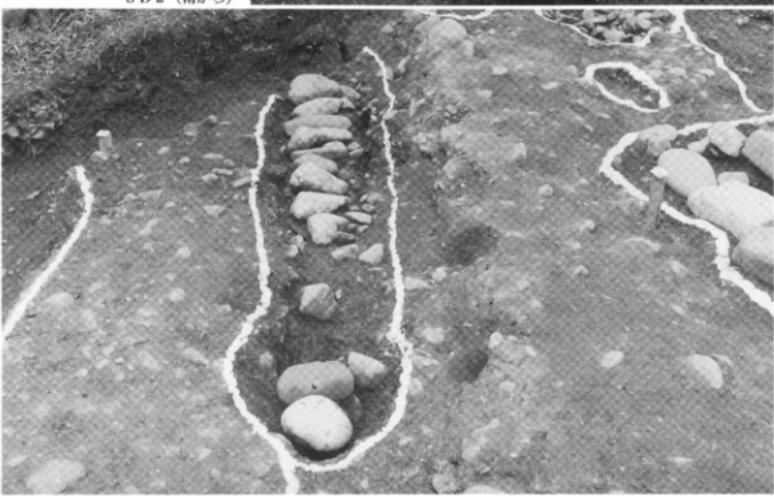
S B 1 (東から)



S D 1 (西から)



SD 2 (南から)



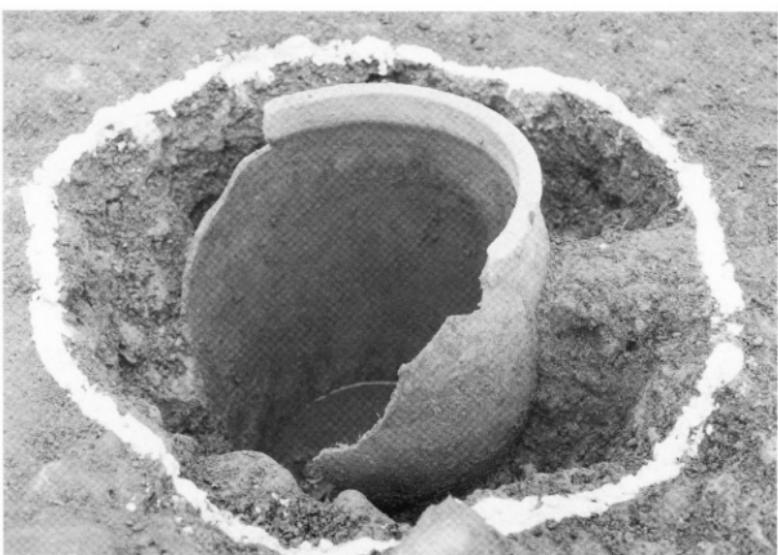
SD 3 (北から)



S E 1 (南から)



S L 1 (北から)



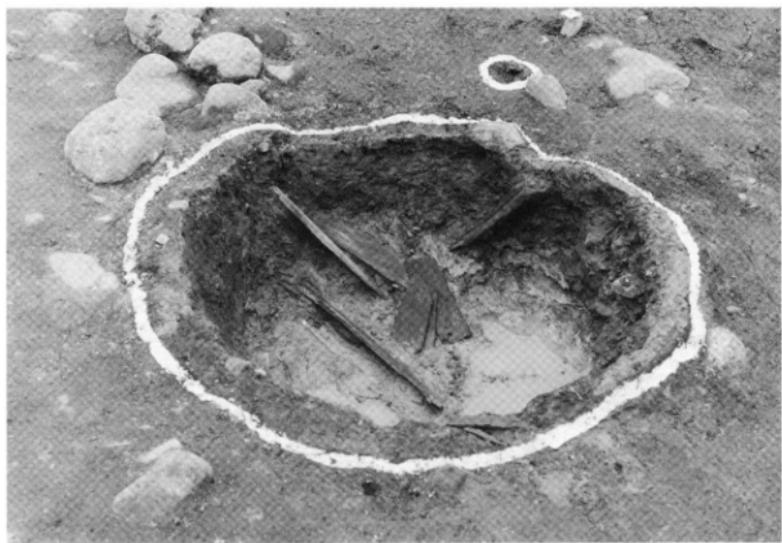
S L 2 (南から)



S N 1・4 (北から)



S N 2 (東から)



S N 3 (南から)



S U 1 (北から)



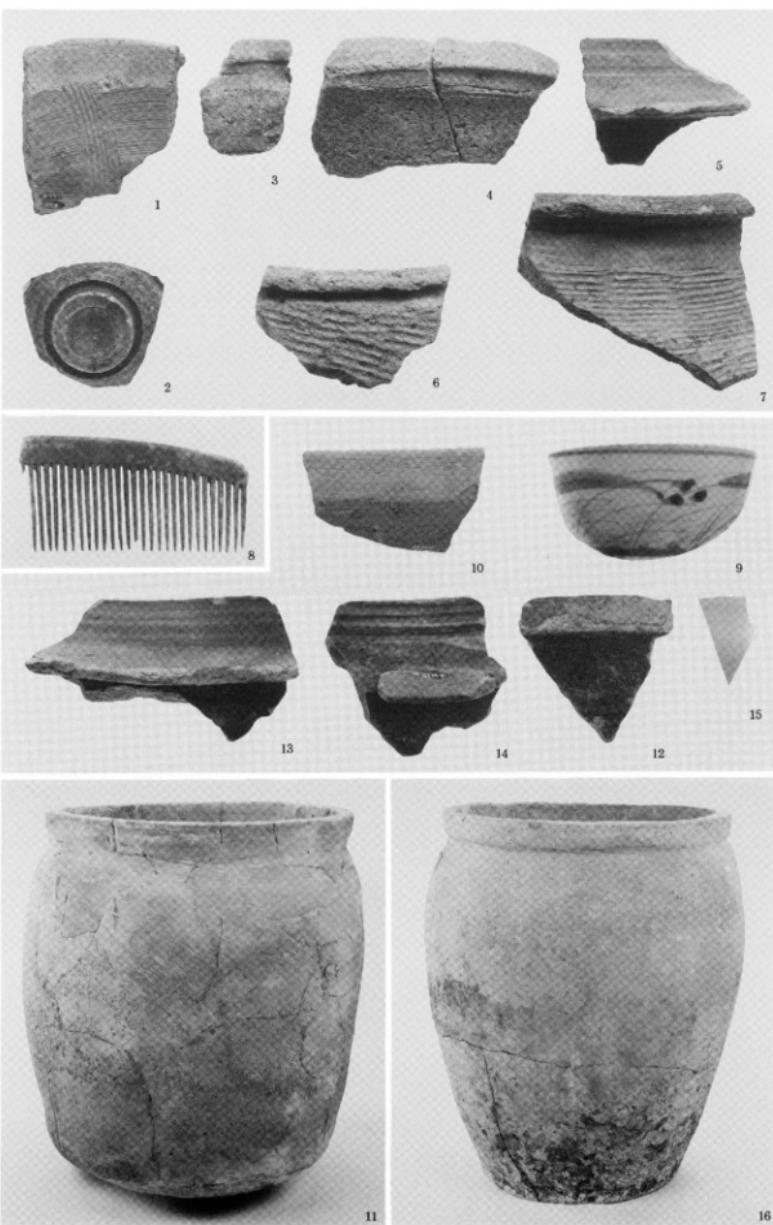
S W 1 (北から)



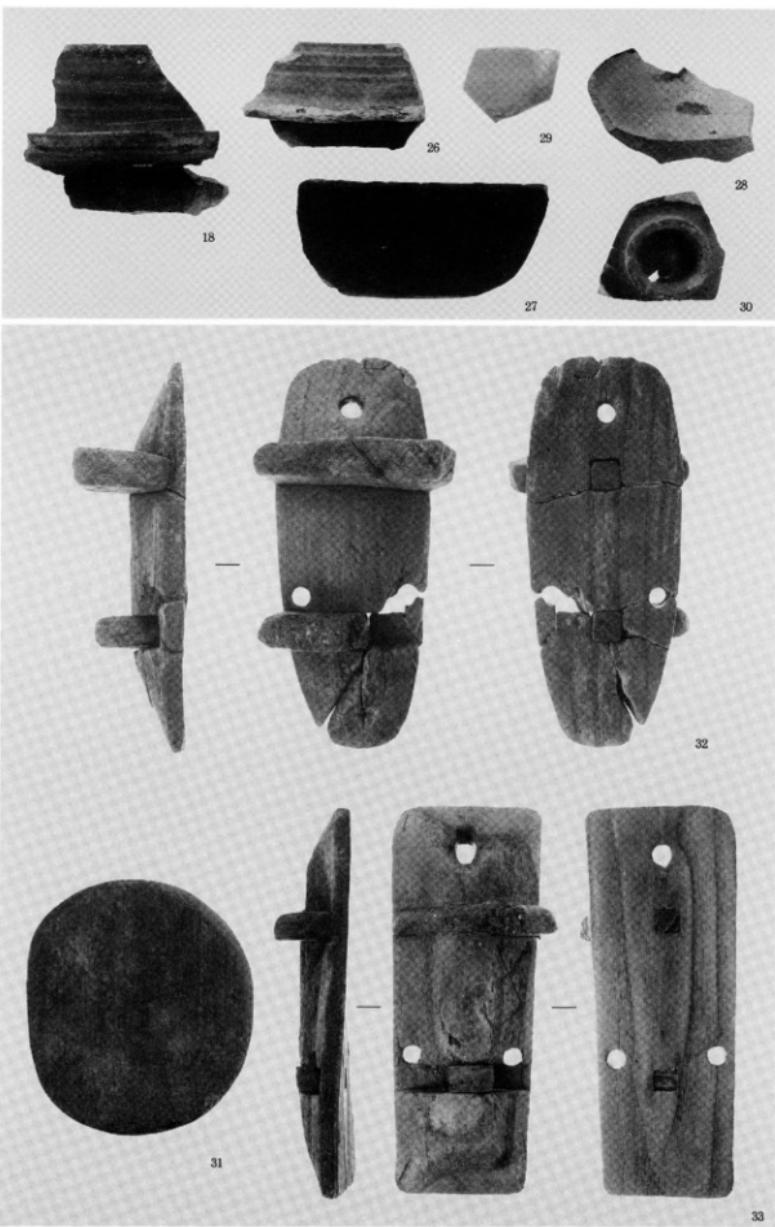
SW 2 (南から)



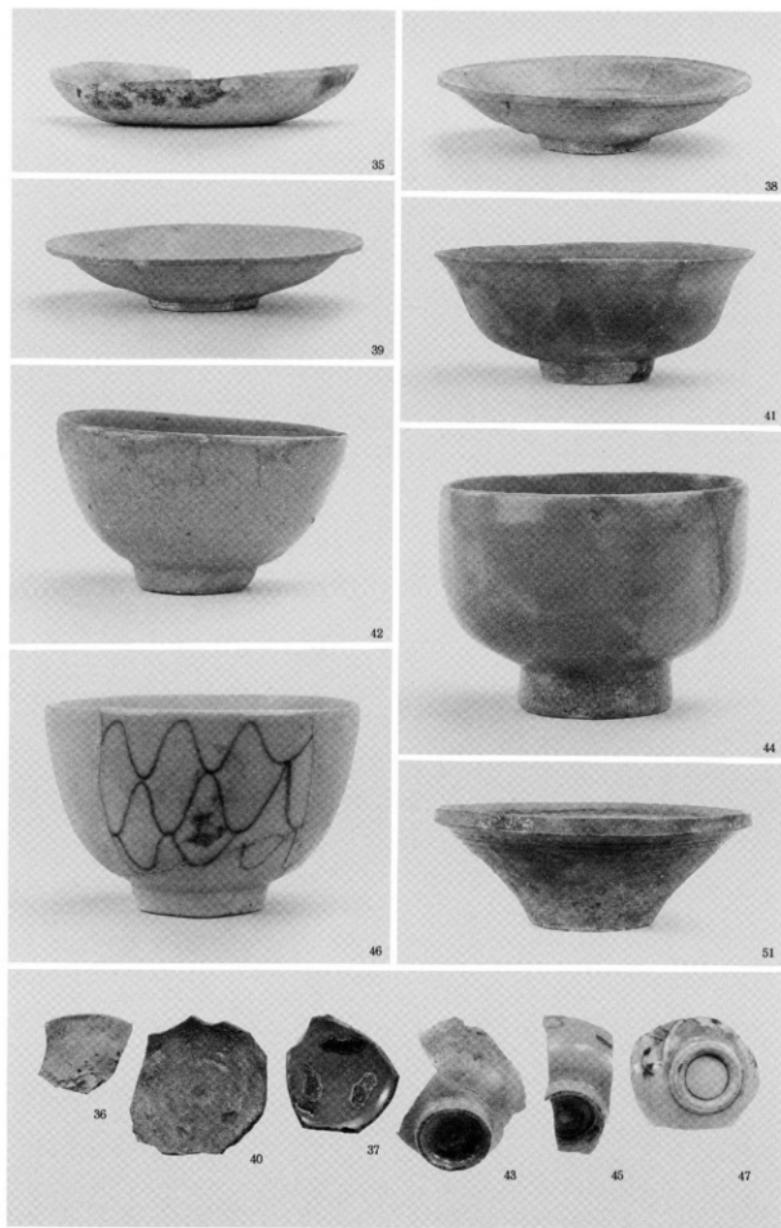
NR 1 (東から)



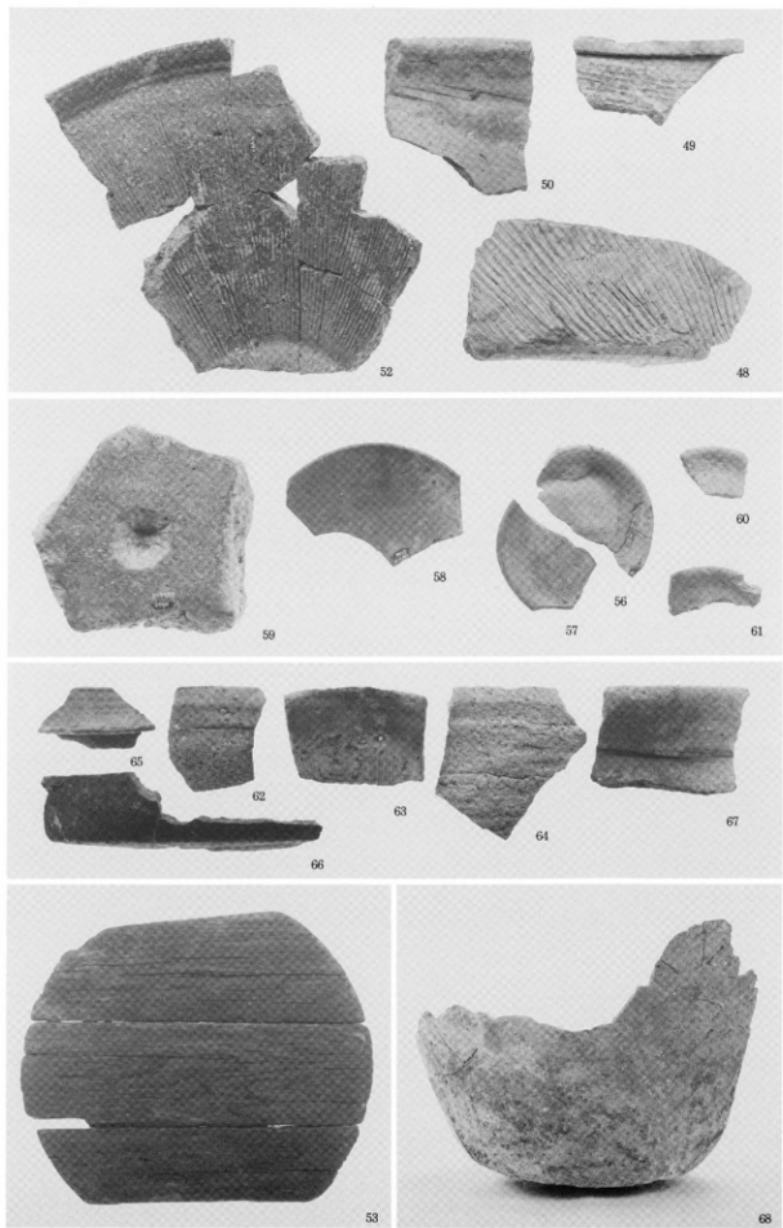
SE 1 (1~7)、SK 2 (8)、SK 3 (9・10)、SL 1 (11~14)、SL 2 (15・16)



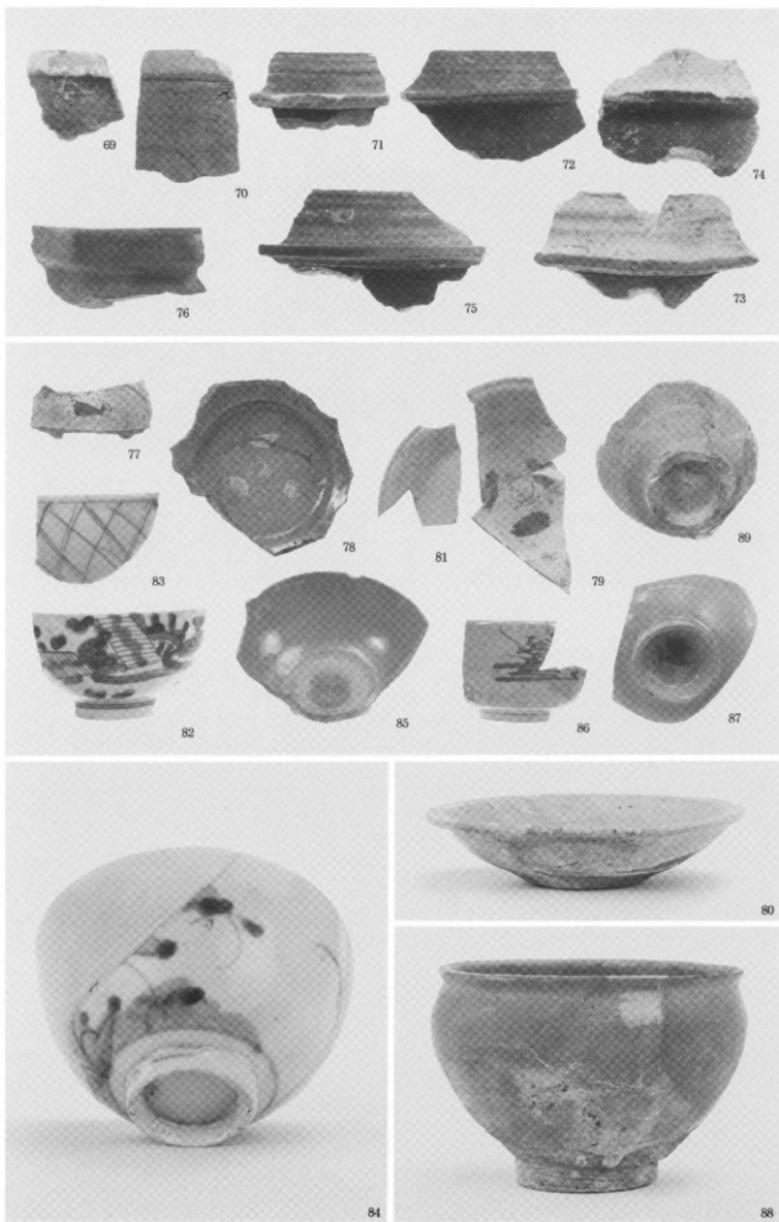
S N 1 (18)、S N 2 (26~33)



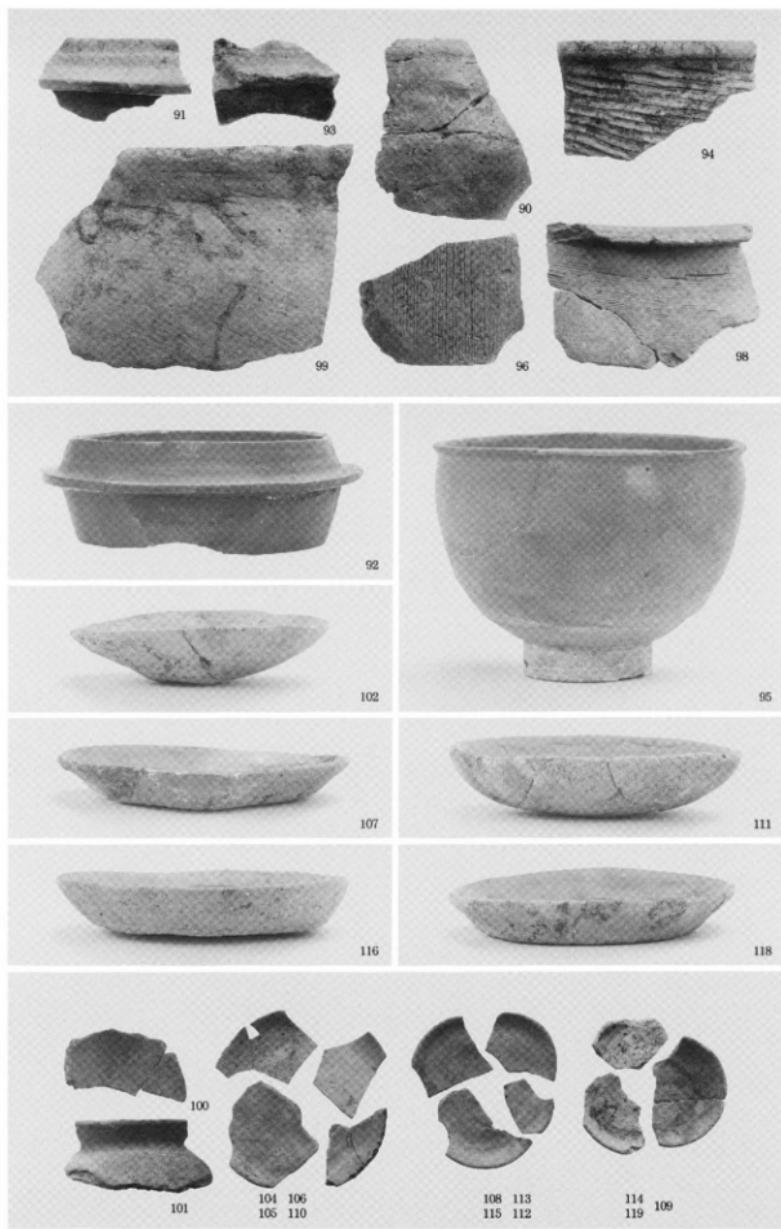
S N 3 (35~39 + 41~47 + 51)



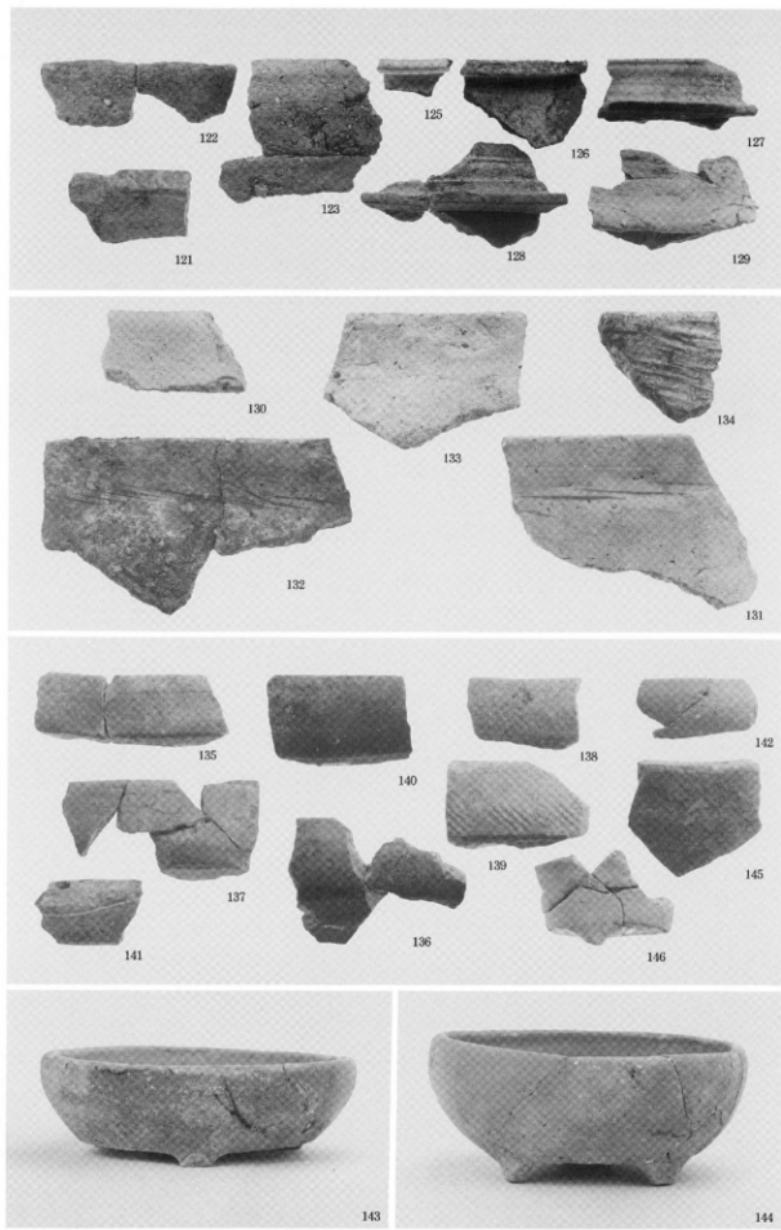
S N 3 (48~50・52・53)、S U 1 (56~59)、S W 2 (60・61)、N R 1 上層 (62~68)



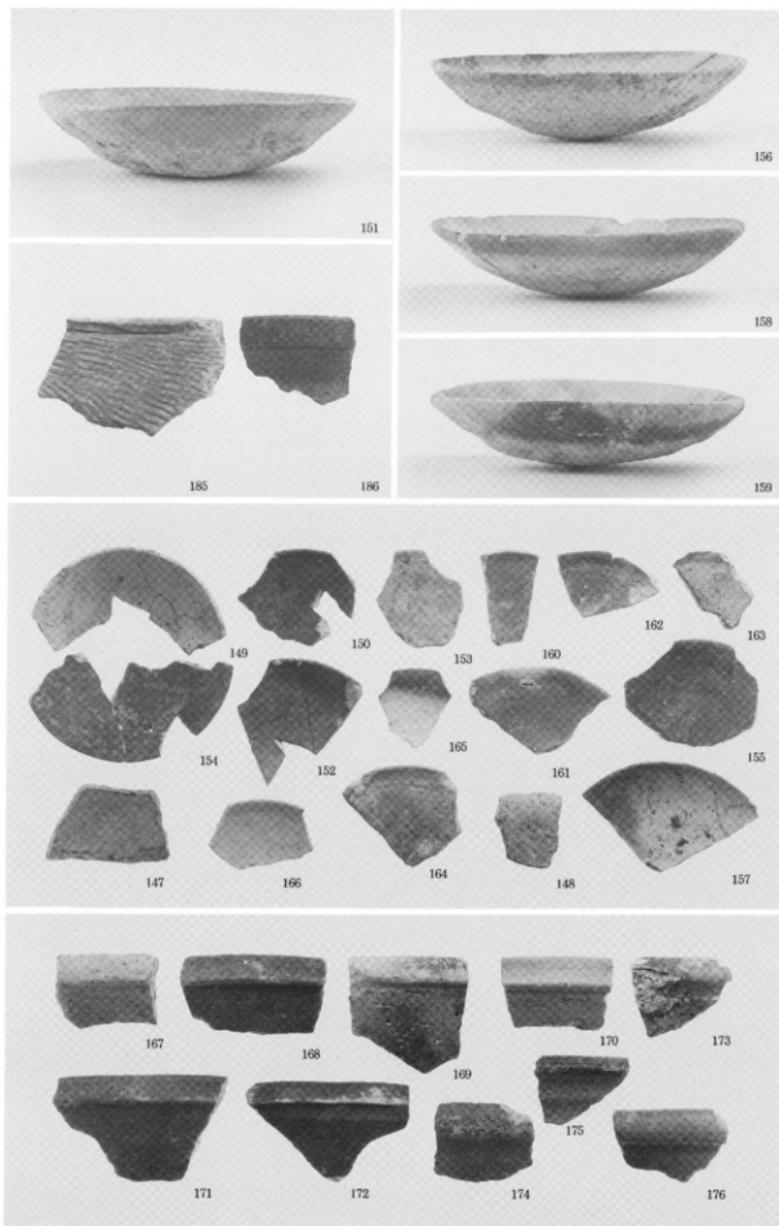
N R 1 上層 (69~89)



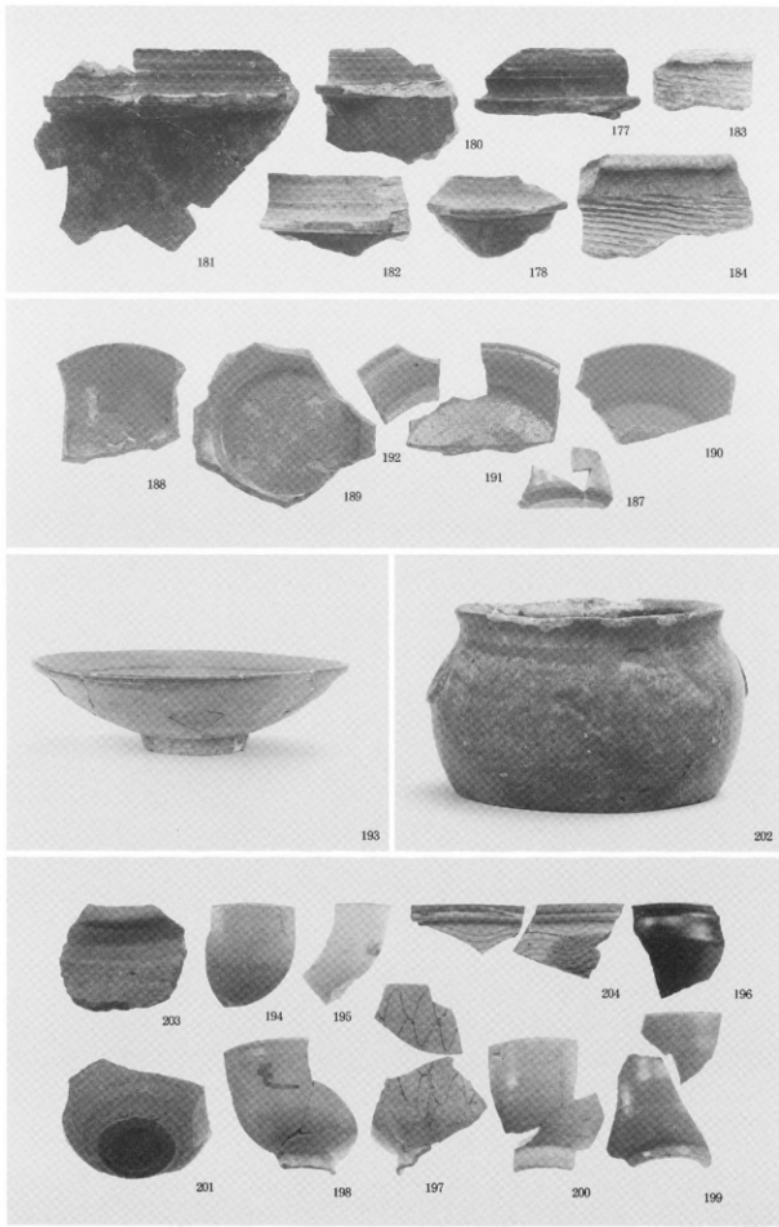
N R 1 下層 (90~96・98・99)、包含層 (100~102・104~116・118・119)



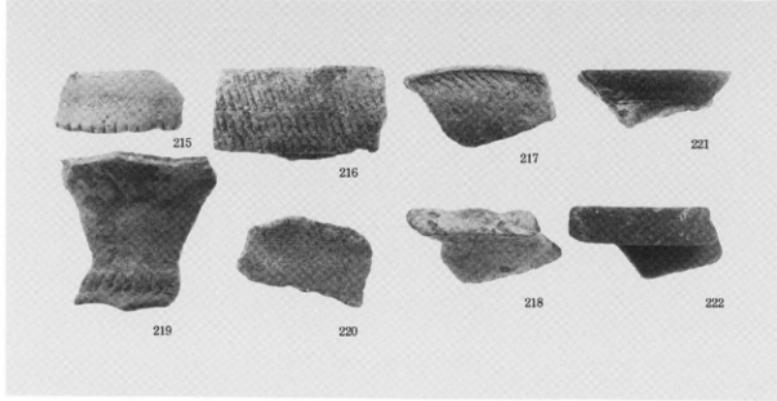
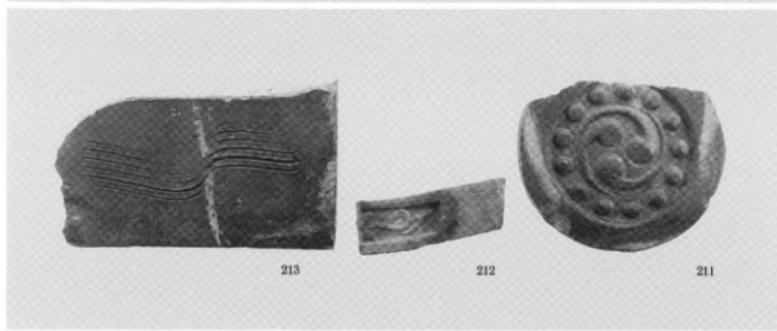
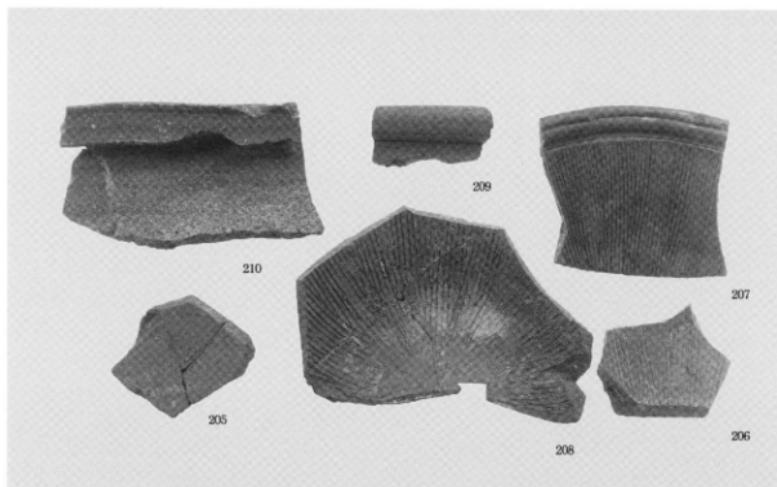
包含層 (121~123 • 125~146)



包含層 (147~176・185・186)



包含層 (177・178・180~184・187~204)



包含層 (205~213・215~222)

報告書抄録

ふりがな	にしきちょうきたいせき
書名	錦町北遺跡
副書名	河内長野市遺跡調査会報 XIV
シリーズ名	河内長野市遺跡調査会報
シリーズ番号	XIV
編著者名	尾谷雅彦 烏羽正剛
編集機関	河内長野市遺跡調査会
所在地	〒586 大阪府河内長野市原町396-3 TEL 0721-53-1111
発行年月日	1996年3月31日

所取遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村					
にしきちょうきたいせき 錦町北遺跡	おおさかふかわながの し 大阪府河内長野市 にしきちょう 錦町	27216 河118	34° 26' 52"	135° 34' 00"	1994.12.02 1995.02.28	500m ²	都市計画道路錦町野作線整備事業に伴う事前調査

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
錦町北遺跡	集落	弥生 中世 近世	掘立柱建物 1棟 溝 4条 井戸 1基 土坑 3基 埋甕遺構 2基 埋桶遺構 4基 石組 3基 集石 1基	弥生土器 土師器 土師質土器 瓦器 瓦質土器 須恵質土器 陶磁器 青磁 木製品 瓦	

河内長野市遺跡調査会報
錦町北遺跡

1996年3月31日発行

発行 大阪府河内長野市原町396-3
河内長野市遺跡調査会
0721-53-1111
印刷 中島弘文堂印刷所

